

日本国特許庁

JAPAN PATENT OFFICE

IC96 U.S. PRO  
09/978058



別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されて  
いる事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed  
with this Office

出願年月日

Date of Application:

2001年 1月12日

CERTIFIED COPY OF  
PRIORITY DOCUMENT

出願番号

Application Number:

特願2001-004617

出願人

Applicant(s):

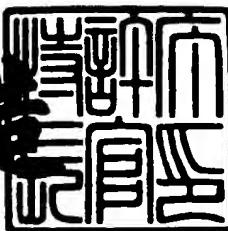
ソニー株式会社

Available Copy

2001年 8月31日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

及川耕造



出証番号 出証特2001-3080834

【書類名】 特許願  
【整理番号】 0001034002  
【提出日】 平成13年 1月12日  
【あて先】 特許庁長官 殿  
【国際特許分類】 H03L 7/06  
【発明者】  
【住所又は居所】 東京都品川区北品川6丁目7番35号 ソニー株式会社  
内  
【氏名】 竹下 徹  
【発明者】  
【住所又は居所】 東京都品川区北品川6丁目7番35号 ソニー株式会社  
内  
【氏名】 西村 隆志  
【特許出願人】  
【識別番号】 000002185  
【氏名又は名称】 ソニー株式会社  
【代理人】  
【識別番号】 100086298  
【弁理士】  
【氏名又は名称】 船橋 國則  
【電話番号】 046-228-9850  
【先の出願に基づく優先権主張】  
【出願番号】 特願2000-318903  
【出願日】 平成12年10月19日  
【手数料の表示】  
【予納台帳番号】 007364  
【納付金額】 21,000円  
【提出物件の目録】  
【物件名】 明細書 1

特2001-004617

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9904452

【ブルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 P L L回路および光通信受信装置

【特許請求の範囲】

【請求項1】 発振周波数が可変な発振器と、

前記発振器の発振周波数信号と入力信号との位相を比較し、その比較結果に基づいて前記発振器の発振周波数信号の位相を進める第1の位相制御信号または位相を遅らせる第2の位相制御信号を出力する位相検出回路と、

前記発振器の発振周波数信号に基づいて位相の異なる第1、第2の信号を発生する信号発生回路と、

前記信号発生回路で発生される前記第1、第2の信号を前記入力信号に同期してその周期ごとに取り込むとともに、その取り込んだ信号と1周期前に取り込んだ信号とを論理演算してその演算結果に基づいて前記発振器の発振周波数信号の周波数を上げる第1の周波数制御信号または周波数を下げる第2の周波数制御信号を出力する周波数検出回路と

を備えたことを特徴とするP L L回路。

【請求項2】 前記第1、第2の信号がクロック信号であることを特徴とする請求項1記載のP L L回路。

【請求項3】 前記第1、第2の信号の位相が互いに90°異なることを特徴とする請求項2記載のP L L回路。

【請求項4】 前記周波数検出回路は、前記入力信号に同期してその周期ごとに前記第1の信号を取り込む第1のサンプリング回路と、前記入力信号に同期してその周期ごとに前記第2の信号を取り込む第2のサンプリング回路と、前記第1、第2のサンプリング回路で取り込まれた信号を保持し、その保持した信号と前記第1、第2のサンプリング回路で次に取り込まれる信号とを論理演算してその演算結果に基づいて前記第1の周波数制御信号または前記第2の周波数制御信号を発生する制御ロジック回路とからなる

ことを特徴とする請求項1記載のP L L回路。

【請求項5】 前記制御ロジック回路は、前記第1、第2のサンプリング回路の各出力信号を論理演算する第1の論理演算回路と、前記第1の論理演算回路

の出力信号を格納する第1の格納回路と、前記第1，第2のサンプリング回路の各出力信号と前記第1の格納回路の格納信号とを論理演算する第2の論理演算回路と、前記第1，第2のサンプリング回路の各出力信号を論理処理した信号と前記第1の格納回路の格納信号とを論理演算する第3の論理演算回路と、前記第2の論理演算回路の出力信号を格納する第2の格納手段と、前記第3の論理演算回路の出力信号を格納する第3の格納手段とを有する

ことを特徴とする請求項4記載のPLL回路。

【請求項6】 前記第1，第2のサンプリング回路は、前記入力信号の立ち上がりまたは立ち下がりのタイミングで前記第1，第2の信号をそれぞれサンプリングする

ことを特徴とする請求項4記載のPLL回路。

【請求項7】 前記第1，第2のサンプリング回路は、フリップフロップによって構成されている

ことを特徴とする請求項4記載のPLL回路。

【請求項8】 前記フリップフロップがD型フリップフロップである  
ことを特徴とする請求項7記載のPLL回路。

【請求項9】 前記D型フリップフロップは、そのクロック入力の立ち上がりタイミングで前記第1，第2の信号を取り込む

ことを特徴とする請求項8記載のPLL回路。

【請求項10】 前記第1，第2および第3の論理演算回路は、OR回路によって構成されている

ことを特徴とする請求項5記載のPLL回路。

【請求項11】 前記第1，第2および第3の格納回路は、フリップフロップによって構成されている

ことを特徴とする請求項5記載のPLL回路。

【請求項12】 前記フリップフロップがD型フリップフロップである  
ことを特徴とする請求項11記載のPLL回路。

【請求項13】 光信号を受光し、この光信号を電気信号に変換して出力する受光手段と、前記受光手段の出力信号に同期したクロック信号を生成するPL

L回路と、前記PLL回路で生成されたクロック信号に基づいて前記受光手段の出力信号に対してリタイミング処理を行うリタイミング回路とを具備する光通信受信装置であって、

前記PLL回路は、

発振周波数が可変な発振器と、

前記発振器の発振周波数信号と入力信号との位相を比較し、その比較結果に基づいて前記発振器の発振周波数信号の位相を進める第1の位相制御信号または位相を遅らせる第2の位相制御信号を出力する位相検出回路と、

前記発振器の発振周波数信号に基づいて位相の異なる第1、第2の信号を発生する信号発生回路と、

前記信号発生回路で発生される前記第1、第2の信号を前記入力信号に同期してその周期ごとに取り込むとともに、その取り込んだ信号と1周期前に取り込んだ信号とを論理演算してその演算結果に基づいて前記発振器の発振周波数信号の周波数を上げる第1の周波数制御信号または周波数を下げる第2の周波数制御信号を出力する周波数検出回路とを有する

ことを特徴とする光通信受信装置。

【請求項14】 前記第1、第2の信号がクロック信号であることを特徴とする請求項13記載の光通信受信装置。

【請求項15】 前記第1、第2の信号の位相が互いに90°異なることを特徴とする請求項14記載の光通信受信装置。

【請求項16】 前記周波数検出回路は、前記入力信号に同期してその周期ごとに前記第1の信号を取り込む第1のサンプリング回路と、前記入力信号に同期してその周期ごとに前記第2の信号を取り込む第2のサンプリング回路と、前記第1、第2のサンプリング回路で取り込まれた信号を保持し、その保持した信号と前記第1、第2のサンプリング回路で次に取り込まれる信号とを論理演算してその演算結果に基づいて前記第1の周波数制御信号または前記第2の周波数制御信号を発生する制御ロジック回路からなる

ことを特徴とする請求項13記載の光通信受信装置。

【請求項17】 前記制御ロジック回路は、前記第1、第2のサンプリング

回路の各出力信号を論理演算する第1の論理演算回路と、前記第1の論理演算回路の出力信号を格納する第1の格納回路と、前記第1、第2のサンプリング回路の各出力信号と前記第1の格納回路の格納信号とを論理演算する第2の論理演算回路と、前記第1、第2のサンプリング回路の各出力信号を論理処理した信号と前記第1の格納回路の格納信号とを論理演算する第3の論理演算回路と、前記第2の論理演算回路の出力信号を格納する第2の格納手段と、前記第3の論理演算回路の出力信号を格納する第3の格納手段とを有する

ことを特徴とする請求項16記載の光通信受信装置。

【請求項18】 前記第1、第2のサンプリング回路は、前記入力信号の立ち上がりまたは立ち下がりのタイミングで前記第1、第2の信号をそれぞれサンプリングする

ことを特徴とする請求項16記載の光通信受信装置。

#### 【発明の詳細な説明】

##### 【0001】

##### 【発明の属する技術分野】

本発明は、PLL(phase locked loop;位相ロックループ)回路および光通信受信装置に関し、特に位相検出回路および周波数検出回路を有するPLL回路およびこれを受信データのリタイミング処理に用いるためのクロック信号の生成回路として用いた光通信受信装置に関する。

##### 【0002】

##### 【従来の技術】

図11に、現在一般的に用いられているPLL回路の構成を示す。このPLL回路は、位相検出(PD)回路101および周波数検出(FD)回路102を有しており、その動作は次の通りである。

##### 【0003】

先ず、周波数検出回路102において、入力信号DATAとクロック信号(ICK, QCK)との周波数比較を行う。そして、その比較結果に基づいてチャージポンプ(CP)回路104およびループフィルタ105介してVCO(電圧制御発振器)106の周波数クロックVCOCLKの周波数を制御することに

より、目標の発振周波数に引き込む。尚、クロック信号（ICLK, QCLK）は、クロック発生器107において、VCO106の発振周波数クロックVCOCLKに基づいて生成される。

#### 【0004】

次に、位相検出回路101において、入力信号DATAとVCO106の発振周波数クロックVCOCLKとの位相比較を行う。そして、その比較結果に基づいてチャージポンプ回路103およびループフィルタ105を介してVCO106の発振周波数クロックVCOCLKの位相を制御することにより、入力信号DATAの位相に対してVCO106の発振周波数クロックVCOCLKの位相を一致させる。

#### 【0005】

この種のPLL回路において、周波数比較回路102として、従来、図12に示す構成のものが用いられていた。以下、この周波数比較回路102の具体的な回路構成およびその動作について説明する。

#### 【0006】

なお、ここでは、NRZ(non-return-to-zero;非ゼロ復帰)波形のデジタル信号DATAが周波数比較回路102に入力されるものとする。また、クロック発生器107では、VCO106の発振周波数クロックVCOCLKを、所定の分周比 $1/n$ （本例では、 $n=1$ ）で分周することによってクロック信号ICLKが、またこれを $90^\circ$ 位相シフトすることによってクロック信号QCLKがそれぞれ得られ、これらクロック信号ICLK, QCLK周波数比較回路102に与えられるものとする。

#### 【0007】

先ず、NRZ波形の入力信号DATAが与えられるデータ入力端子111は、D-FF（D型フリップフロップ）112のD（データ）入力端子に接続されるとともに、EX-OR（排他的論理和）ゲート113の一方の入力端子Aに接続されている。一方、クロック信号ICLKが与えられるICLK入力端子114はANDゲート116, 117の各一方の入力端子Aに接続され、クロック信号QCLKが与えられるQCLK入力端子115はANDゲート116, 117の

各他方の入力端子Bに接続されている。ただし、ANDゲート117の一方の入力端子Aは、クロック信号ICLKの極性が反転されて入力される反転入力端子である。

## 【0008】

ANDゲート116, 117の各出力端子は、D-FF118, 119の各D入力端子に接続されている。これらD-FF118, 119の各CLK(クロック)入力端子には、EX-ORゲート113の出力端子が接続されている。D-FF118, 119の各Q出力端子はD-FF120, 121の各D入力端子に接続され、これらD-FF120, 121の各Q出力端子はD-FF122, 123の各D入力端子に接続されている。なお、D-FF112およびD-FF120~123の各CLK端子は、ICLK入力端子114に接続されている。

## 【0009】

D-FF122のQ出力端子は、ANDゲート124の一方の入力端子Aに接続されている。D-FF123のQ出力端子は、ANDゲート125の他方の入力端子Bに接続されている。D-FF120のQ出力端子はさらにANDゲート125の一方の入力端子Aに接続され、D-FF121のQ出力端子はさらにANDゲート124の他方の入力端子Bに接続されている。そして、ANDゲート124, 125の各出力端子は、回路出力端子126, 127にそれぞれ接続されている。

## 【0010】

なお、ANDゲート124からはその出力信号として、図11のVCO106の発振周波数を下げる方向に制御するDOWNパルス信号が導出され、ANDゲート125からはその出力信号として上記発振周波数を上げる方向に制御するUPパルス信号が導出される。そして、DOWNパルス信号およびUPパルス信号は、回路出力端子126, 127を介して図11のチャージポンプ回路104へ供給される。

## 【0011】

次に、上記構成の周波数検出回路の回路動作について、図13のタイミングチャートを参照して説明する。なお、図13のタイミングチャートにおいて、波形

(a) ~ (o) は、図12の各ノード (a) ~ (o) の波形をそれぞれ示している。

#### 【0012】

先ず、クロック信号 ICLK (a) は、時刻  $t_0$  で立ち上がって “H” レベルになり、時刻  $t_2$  で立ち下がって “L” レベルになるパルス波形である。以下同様に、時刻  $t_4, t_8, t_{12}, \dots$  で立ち上がり、時刻  $t_6, t_{10}, \dots$  で立ち下がる。このクロック信号 ICLK (a) は、 ICLK 入力端子 114 を介して AND ゲート 116, 117 の各一方の入力端子 A に供給されるとともに、 D-FF112 および D-FF120 ~ 123 の各 CLK 端子に供給される。

#### 【0013】

クロック信号 ICLK (a) に対して、クロック信号 QCLK (b) は  $90^\circ$  位相シフトされた、具体的には  $90^\circ$  位相が遅れたパルス波形となっている。すなわち、時刻  $t_1, t_5, t_9, \dots$  で立ち上がって “H” レベルになり、時刻  $t_3, t_7, t_{11}, \dots$  で立ち下がって “L” レベルになる。このクロック信号 QCLK (b) は、 QCLK 入力端子 115 を介して AND ゲート 116, 117 の各他方の入力端子 B に供給される。

#### 【0014】

AND ゲート 116 は、クロック信号 ICLK (a) とクロック信号 QCLK (b) との論理積をとることから、これらクロック信号 ICLK, QCLK が共に “H” レベルとなる期間、即ち時刻  $t_1 \sim t_2$  の期間、時刻  $t_5 \sim t_6$  の期間、時刻  $t_9 \sim t_{10}$  の期間で、その出力信号 (c) が “H” レベルとなる。それ以外の期間、即ち時刻  $t_0 \sim t_1$ 、時刻  $t_2 \sim t_5$  の期間、時刻  $t_6 \sim t_9$  の期間、時刻  $t_{10} \sim t_{12}$  の期間では、出力信号 (c) は “L” レベルとなる。

#### 【0015】

一方、AND ゲート 117 は、クロック信号 ICLK (a) の反転クロック信号 ICLKX とクロック信号 QCLK (b) との論理積をとることから、これらクロック信号 ICLKX, QCLK が共に “H” レベルとなる期間、即ち時刻  $t_2 \sim t_3$  の期間、時刻  $t_6 \sim t_7$  の期間、時刻  $t_{10} \sim t_{11}$  の期間で、その出力信号 (d) が “H” レベルとなる。それ以外の期間、即ち時刻  $t_0 \sim t_2$ 、時

時刻  $t_3 \sim t_6$  の期間、時刻  $t_7 \sim t_{10}$  の期間、時刻  $t_{11}$  以降の期間では、出力信号 (d) は “L” レベルとなる。

#### 【0016】

図13のタイミングチャートにおいて、出力信号 (c) の “H” レベルの期間を期間A、出力信号 (d) の “H” レベルの期間を期間Bとそれぞれ記す。

#### 【0017】

一方、NRZの入力信号DATA (f) は、データ入力端子111を介して直接、EX-ORゲート113の一方の入力端子Aに供給されるとともに、D-F F112のD入力端子に供給される。D-F F112は、クロック信号ICLK (a) の立ち上がりタイミングでD入力端子の入力波形の “H” レベル／“L” レベルを取り込む。この場合、時刻  $t_0$  では入力信号DATA (f) が “H” レベルとすると、これを取り込むことでそのQ出力信号 (e) が “H” レベルとなる。

#### 【0018】

また、時刻  $t_1$  と  $t_2$  の間で入力信号DATA (f) が変化し、その極性が反転していることから、次のクロック信号ICLK (a) の立ち上がりタイミング  $t_4$  では、“L” レベルの入力信号DATA (f) を取り込み、そのQ出力信号 (e) が “L” レベルになる。さらに、時刻  $t_6$  と  $t_7$  の間で入力信号DATA (f) の極性が再度反転していることから、次のクロック信号ICLK (a) の立ち上がりタイミング  $t_8$  で “H” レベルの入力信号DATA (f) の “H” レベルを取り込み、そのQ出力信号 (e) が “H” レベルになる。それ以降時刻  $t_{12}$  までは、この “H” レベルを維持し続ける。

#### 【0019】

このD-F F112のQ出力信号 (e) は、EX-ORゲート113の他方の入力端子Bに供給され、このEX-ORゲート113において、その一方の入力端子Aに供給される入力信号DATA (f) との排他的論理和演算が行われる。その結果、EX-ORゲート113の出力信号 (g) は、図13のタイミングチャートから明らかのように、時刻  $t_1 \sim t_2$  の期間中の入力信号DATA (f) の反転時に “L” レベルから “H” レベルに遷移し、D-F F112のQ出力信

号 (e) が “L” レベルに遷移する時刻  $t_4$  で “L” レベルへ遷移する。

#### 【0020】

この時刻  $t_4$  から入力信号 DATA (f) のデータ反転期間の間、EX-OR ゲート 113 の出力信号 (g) は “L” レベルを維持し続ける。そして、時刻  $t_6$  と  $t_7$  の間で入力信号 DATA (f) が反転すると、その反転タイミングで EX-OR ゲート 113 の出力信号 (g) は “L” レベルから “H” レベルへ遷移する。

#### 【0021】

続いて、時刻  $t_8$  になると、D-FF112 の Q 出力信号 (e) が “L” レベルから “H” レベルに遷移するので、入力信号 DATA (f) の “H” レベルとこの Q 出力信号 (e) の “H” レベルとの排他的論理和演算が行われることで、EX-OR ゲート 113 の出力信号 (g) が “L” レベルに遷移する。そして、それ以降の時刻  $t_8 \sim t_{12}$  の期間においては、EX-OR ゲート 113 の出力信号 (g) のレベルは変化しない。

#### 【0022】

AND ゲート 116, 117 の各出力信号 (c), (d) は、次段の D-FF 118, 119 の各 D 入力端子に供給される。D-FF118, 119 は、EX-OR ゲート 113 の出力信号 (g) を CLK 入力としており、このクロック波形の立ち上がりのタイミングで D 入力波形を取り込み、そのレベルを Q 出力信号 (h), (k) として導出する。

#### 【0023】

ここで、EX-OR ゲート 113 の出力信号 (g) が時刻  $t_1 \sim t_2$  の期間で立ち上がり、この期間では AND ゲート 116 の出力信号 (c) が “H” レベル、AND ゲート 117 の出力信号 (d) が “L” レベルであるから、D-FF118 の Q 出力信号 (h) が “H” レベルに、D-FF119 の Q 出力信号 (k) が “L” レベルになる。

#### 【0024】

EX-OR ゲート 113 の出力信号 (g) が次に “L” レベルから “H” レベルに遷移するタイミングは、時刻  $t_6 \sim t_7$  の期間における入力信号 DATA (

f) の変化点である。このタイミングにおけるANDゲート116の出力信号(c)が“L”レベル、ANDゲート117の出力信号(d)が“H”レベルであるから、D-FF118のQ出力信号(h)が“H”レベルから“L”レベルに遷移し、D-FF119のQ出力信号(k)が“L”レベルから“H”レベルに遷移し、時刻t12までこれらのレベルを維持し続ける。

#### 【0025】

これらD-FF118, 119の各Q出力信号(h), (k)はD-FF120, 121の各D入力端子に供給される。D-FF120, 121は、クロック信号ICLK(a)をCLK入力としており、その波形の立ち上がりタイミングでD入力波形を取り込む。ここで、クロック信号ICLK(a)の立ち上がりタイミングは時刻t4であり、そのときのD-FF118のQ出力信号(h)が“H”レベル、D-FF119のQ出力信号(k)が“L”レベルであるので、D-FF120のQ出力信号(i)は“H”レベルに、D-FF121のQ出力信号(l)は“L”レベルになる。

#### 【0026】

クロック信号ICLK(a)の次の立ち上がりタイミングは時刻t8であり、このときのD-FF118のQ出力信号(h)が“L”レベルであるので、D-FF120のQ出力信号(i)は“L”レベルに遷移し、またD-FF119のQ出力信号(k)が“H”レベルであるので、D-FF121のQ出力信号(l)は“H”レベルに遷移する。そして、これらQ出力信号(i), (l)の各レベルは、時刻t12まで維持される。

#### 【0027】

D-FF120, 121の各Q出力信号(i), (l)は次段のD-FF122, 123の各D入力端子に供給される。これらD-FF122, 123も、クロック信号ICLK(a)をCLK入力としており、その波形の立ち上がりタイミングでD入力波形を取り込む。ここで、クロック信号ICLK(a)の立ち上がりタイミングは時刻t8であり、この時点でのD-FF120, 121のQ出力信号(i), (l)の各レベルを取り込むことになり、その結果、D-FF122のQ出力信号(j)は“H”レベルに、D-FF123のQ出力信号(m)

は“L”レベルになる。

#### 【0028】

クロック信号 I C L K (a) が次に立ち上がるタイミングは時刻  $t_{12}$  であり、そのタイミングでの D-F F 1 2 0 の Q 出力信号 (i) が“L”レベル、D-F F 1 2 1 の Q 出力信号 (l) が“H”レベルであるから、D-F F 1 2 2 の Q 出力信号 (j) は“H”レベルから“L”レベルに、D-F F 1 2 3 の Q 出力信号 (m) は“L”レベルから“H”レベルにそれぞれ遷移する。

#### 【0029】

D-F F 1 2 2 の Q 出力信号 (j) は、AND ゲート 1 2 4 の入力端子 A に供給される。AND ゲート 1 2 4 の入力端子 B には、D-F F 1 2 1 の Q 出力信号 (l) が供給される。これにより、AND ゲート 1 2 4 の出力信号 (n) である DOWN パルス信号は、時刻  $t_4$  で D-F F 1 2 1 の Q 出力信号 (l) が“L”レベルに遷移するので“L”レベルになり、時刻  $t_8$  になると D-F F 1 2 1, 1 2 2 の各 Q 出力信号 (l), (j) が共に“H”レベルに遷移するので“H”レベルになる。

#### 【0030】

また、時刻  $t_{12}$  になると、D-F F 1 2 1 の Q 出力信号 (l) のレベルは変化せず“H”レベルのままであるが、D-F F 1 2 2 の Q 出力信号 (j) のレベルが“H”レベルから“L”レベルに遷移するので、AND ゲート 1 2 4 の出力信号 (n)、即ち DOWN パルス信号は“H”レベルから“L”レベルに遷移する。

#### 【0031】

一方、D-F F 1 2 3 の Q 出力信号 (m) は、AND ゲート 1 2 5 の入力端子 B に供給される。AND ゲート 1 2 5 の入力端子 A には、D-F F 1 2 0 の Q 出力信号 (i) が供給される。これにより、AND ゲート 1 2 5 の出力信号 (o) である UP パルス信号は、時刻  $t_8$  で D-F F 1 2 0, 1 2 3 の各 Q 出力信号 (i), (m) が共に“L”レベルに遷移するので“L”レベルとなる。また、時刻  $t_{12}$  になると、D-F F 1 2 3 の Q 出力信号 (m) が“H”レベルに遷移するが、D-F F 1 2 0 の Q 出力信号 (i) が“L”レベルであるので、AND ゲ

ート125の出力信号(o)は“L”レベルを維持する。

#### 【0032】

以上から、図12の周波数検出回路の動作をまとめると次のようになる。あるDATA変化時点において( $ICLK, QCLK = (0, 1)$ )をサンプリングした後の次のDATA変化時点で( $(1, 1)$ )をサンプリングすると、クロック信号ICLKの1周期分の長さのUPパルス信号を出力する。すなわち、この2つのDATA変化点の間にm(mは任意の整数)ビットのデータが存在すると、この間のクロック信号ICLKはmサイクル以下存在することになるから、クロック信号ICLKの周波数を高くするため、UPパルス信号のパルスが生じることになる。

#### 【0033】

また、あるDATA変化時点において( $ICLK, QCLK = (0, 1)$ )をサンプリングした後の次のDATA変化時点で( $(0, 0)$ )をサンプリングすると、クロック信号ICLKの1周期分の長さのDOWNパルス信号を出力する。すなわち、この2つのDATA変化点の間にm'(m'は任意の整数)ビットのデータが存在すると、この間のクロック信号ICLKはm'サイクル以上存在することになるから、クロック信号ICLKの周波数を低くするため、DOWNパルス信号のパルスが生じることになる。

#### 【0034】

クロック信号ICLKと入力信号DATAの周波数が完全に一致しているときは、(0, 0), (0, 1), (1, 0) (1, 1)のいずれかをDATA変化時点でサンプリングし続け、UPパルス信号、DOWNパルス信号のパルスは発生しない。

#### 【0035】

このように、ANDゲート124の出力信号(n)をDOWNパルス信号として、またANDゲート125の出力信号(o)をUPパルス信号として、図11のチャージポンプ回路104に供給する。そして、これらDOWN/UPパルス信号によって当該チャージポンプ回路104を制御し、その出力電流を平滑化(整流)することで、ループフィルタ105を介してVCO106の制御電圧を発

生させる。

## 【0036】

以上においては、入力信号DATAやクロック信号（ICLK, QCLK）のデューティ比をそれぞれ100%、50%として周波数検出回路102の動作を説明した。しかしながら、特に光通信などにおいては、図14（b），（c）に示すように、伝送信号DATAにはデューティ歪が生じているため、PLL回路が誤動作する可能性がある。図15に、デューティ歪のある場合のクロックICLK, QCLKおよび伝送信号DATAの各波形を示す。

## 【0037】

## 【発明が解決しようとする課題】

上述したように、従来例に係る周波数検出回路では、入力信号DATAの変化点でクロック信号ICLKとクロック信号QCLKの値をサンプリングしているので、周波数が完全に一致していると、図13に対応した時刻t2とt3の期間のサンプリング値はクロック信号ICLKが“0”、クロック信号QCLKが“1”であり、また次のDATA変化点t6とt7の間でのサンプリング値はクロック信号ICLKが“0”、クロック信号QCLKが“1”、さらに時刻t10とt11の間にDATA変化点が存在するとすると、そのサンプリング値はやはりクロック信号ICLKが“0”、クロック信号QCLKが“1”となり、3つの変化点のサンプリング値はいずれも同じであることがわかる。

## 【0038】

しかし、入力信号DATAが歪み、デューティ比が異なる場合のタイミング関係を示す図15のタイミングチャートから明らかのように、クロック信号ICLKを90°位相遅延したものがクロック信号QCLKであり、これに対して入力信号DATAのデューティ比が大きくなり、その“H”レベルの1ビット分幅がクロック信号ICLKの周期よりも大きい場合、時刻t1とt2間で入力信号DATAが立ち上がりると、この立ち上がりエッジでのクロック信号ICLKのレベルが“1”、クロック信号QCLKのレベルが“1”である。

## 【0039】

次に、入力信号DATAの立ち下がりエッジt7とt8の間においては、クロ

ック信号 ICLK, QCLK のレベルが共に “0” となり、入力信号 DATA の立ち上がりと立ち下がりエッジにおけるクロック信号 ICLK, QCLK のサンプリング値は (1, 1) から (0, 0) と変化してしまい、誤動作することが解かる。

#### 【0040】

また、入力信号 DATA のデューティ比が小さくなり、その “H” レベルの 1 ビット分幅がクロック信号 ICLK の周期よりも小さくなると、図示してあるように、時刻  $t_3$  と  $t_4$  の間にある立ち上がりエッジではクロック信号 ICLK, QCLK のレベルが共に “0” となる。しかし、時刻  $t_5$  と  $t_6$  の期間にある入力信号 DATA の立ち下がりエッジのクロック信号 ICLK, QCLK のレベルが共に “1” となり、(0, 0) から (1, 1) とクロック信号 ICLK, QCLK のサンプリング値が異なってくる。

#### 【0041】

その結果、周波数検出回路は誤動作してしまう。すなわち、従来例に係る周波数検出回路では、入力信号 DATA の立ち上がりおよび立ち下がりの遷移点の両方で、即ち入力信号 DATA の 1/2 周期でクロック信号 ICLK とクロック信号 QCLK をサンプリングしているため、入力信号 DATA が歪み、デューティ比が変化した場合に回路が誤動作するという課題があった。

#### 【0042】

##### 【課題を解決するための手段】

上記課題を解決するために、本発明では、VCO、位相検出回路および周波数検出回路を有するPLL回路、あるいはこのPLL回路を用いた光通信受信装置において、周波数検出回路を次のように構成とした。すなわち、VCO の発振周波数信号に基づく、位相の異なる第1, 第2 の信号を入力信号に同期してその周期ごとに取り込むとともに、その取り込んだ信号と 1 周期前に取り込んだ信号とを論理演算し、その演算結果に基づいて VCO の発振周波数信号の周波数を上げる第1 の周波数制御信号または周波数を下げる第2 の周波数制御信号を出力する構成とする。

#### 【0043】

上記構成の周波数検出回路において、位相の異なる第1，第2の信号を入力信号の周期ごとに取り込む、即ち入力信号の立ち上がりタイミング（または、立ち下がりタイミング）のみで行うことで、入力信号のデューティ比が変化しても、入力信号と第1，第2の信号との周波数が一致している場合、その取り込み値は常に等しくなる。これにより、入力信号のデューティ比が変化した場合であっても、入力信号と第1，第2の信号との周波数が一致している限り、誤った第1／第2の周波数制御信号を発生することではなく、安定したPLL動作ができる。

## 【0044】

## 【発明の実施の形態】

以下、本発明の実施の形態について図面を参照して詳細に説明する。図1は、本発明の一実施形態に係るPLL回路の構成例を示すブロック図である。ここでは、本PLL回路が例えば光通信における受信装置に用いられる場合を例に採って説明するものとするが、この適用例に限られるものではない。

## 【0045】

図1において、本PLL回路10は、位相検出(PD)回路11、周波数検出(FD)回路12、チャージポンプ(CP)回路13, 14、ループフィルタ15、VCO(電圧制御発振器)16およびクロック発生器17を有する構成となっている。そして、本PLL回路10の回路入力端子18には、シリアルのデジタル信号DATAが入力信号される。ここで、光通信で用いられるデジタル信号DATAとしては、NRZの信号(波形)が採用されている。

## 【0046】

回路入力端子18は、位相検出回路11の一方の入力端子(データ入力端子)および周波数検出回路12のデータ入力端子121に接続されている。位相検出回路11の他方の入力端子は、VCO16の出力端子に接続されている。周波数検出回路12のICLK入力端子122およびQCLK入力端子123は、クロック発生器17のICLK出力端子171およびQCLK出力端子172にそれぞれ接続されている。

## 【0047】

位相検出回路11の出力端子は、チャージポンプ回路13の入力端子に接続さ

れている。チャージポンプ回路13の出力端子は、ループフィルタ15を介してVCO16の制御入力端子に接続されている。周波数検出回路12の出力端子127, 128は、チャージポンプ回路14の対応する入力端子にそれぞれ接続されている。チャージポンプ回路14の出力端子も、ループフィルタ15を介してVCO16の制御入力端子に接続されている。

#### 【0048】

ループフィルタ15は、例えば、チャージポンプ回路13, 14の各出力端子間に接続された抵抗R11と、チャージポンプ回路14の出力端子とグランドとの間に接続されたコンデンサC11とからなるローパスフィルタ構成となっている。VCO16の出力端子は、先述したように、位相比較回路11の他方の入力端子に接続されるとともに、回路出力端子19およびクロック発生器17のクロック入力端子173に接続されている。

#### 【0049】

クロック発生器17は、分周器174および移相回路175を有し、VCO16の発振周波数クロックに基づいて互いに位相が異なる第1, 第2の信号、例えば、VCO発振周波数クロックと同相(Phase)のクロック信号ICLKとこのクロック信号ICLKに対して例えば $90^\circ$ (Quadrature Phase)位相シフト(移相)したクロック信号QCLKとを発生する。

#### 【0050】

具体的には、分周器174は、VCO16の発振周波数クロックを所定の分周比( $1/n$ )で分周して移相回路175に供給する。移相回路175は、分周器174での分周クロックを、そのままクロック信号ICLKとして出力端子171から、またこのクロック信号ICLKに対して例えば $90^\circ$ 位相をシフトしてクロック信号QCLKとして出力端子172からそれぞれ出力する。

#### 【0051】

上記構成のPLL回路10において、NRZのデジタル信号は、回路入力端子18を介して位相検出回路11の一方の入力端子および周波数検出回路12のデータ入力端子121に供給される。一方、位相検出回路の他方の入力端子にはVCO16の発振周波数クロックが供給され、また周波数検出回路12のICL

K出力端子122およびQCLK出力端子123にはクロック発生器17で発生されるクロック信号ICLK, QCLKがそれぞれ供給される。

## 【0052】

周波数検出回路12は、2つのDFF124, 125および制御ロジック回路126を有する構成となっている。DFF124は、そのD入力端子がICLK入力端子122に、CLK端子がデータ入力端子121にそれぞれ接続されている。DFF125は、そのD入力端子がQCLK入力端子123に、CLK端子がデータ入力端子121にそれぞれ接続されている。

## 【0053】

ここで、2つのDFF124, 125および制御ロジック回路126からなる周波数検出回路12の回路動作について、図2のタイミングチャートを用いて説明する。

## 【0054】

先ず、ICLK入力端子122に供給されるクロック信号ICLKのタイミング波形は、時刻t0から時刻t2の期間で“H”レベル、時刻t2から時刻t4の期間で“L”レベル、時刻t4から時刻t6の期間で“H”レベル、時刻t6から時刻t8の期間で“L”レベル、時刻t8から時刻t10の期間で“H”レベル、時刻t10から時刻t12の期間で“L”レベル、さらに時刻t12から時刻t14の期間で“H”レベルとなっている。

## 【0055】

また、QCLK入力端子123に供給されるクロック信号QCLKは、クロック信号ICLKに対して90°位相を遅延した波形であり、時刻t1から時刻t3の期間で“H”レベル、時刻t3から時刻t5の期間で“L”レベル、時刻t5から時刻t7の期間で“H”レベル、時刻t7から時刻t9の期間で“L”レベル、時刻t9から時刻t11の期間で“H”レベル、時刻t11から時刻t13の期間で“L”レベル、さらに時刻t13から時刻t15の期間で“H”レベルとなっている。

## 【0056】

一方、データ入力端子121に供給される入力信号DATAの波形は、時刻t

0から時刻  $t_2$ まで“L”レベル、時刻  $t_2$ から時刻  $t_6$ まで“H”レベル、時刻  $t_6$ から時刻  $t_{10}$ まで“L”レベル、時刻  $t_{10}$ から時刻  $t_{13}$ まで“H”レベル、時刻  $t_{13}$ 以降“L”レベルとなっている。

#### 【0057】

ここで、D-F F124, 125のD入力データの取り込みタイミングをクロックの立ち上がりとすると、時刻  $t_2$ のタイミングでクロック信号 ICLKとクロック信号 QCLKの論理レベル、( ICLK, QCLK) = (0, 1)を取り込み、そのデータに対応した値をQ出力信号として次段の制御ロジック回路126に供給する。

#### 【0058】

この周波数検出回路12は、D-F F124, 125のD入力端子に供給されるデータが特定の値(0, 1)をサンプリングしたときにウインドウを開き、次のサンプリング値によって比較結果を出力する機能を持っている。

#### 【0059】

入力信号DATAの時刻  $t_2$ の次の立ち上がりタイミングにおいて、その立ち上がりタイミングが時刻  $t_{10}$ であると、D-F F124, 125におけるD入力端子のデータ取り込み値は(0, 1)となる。このときは、次段の制御ロジック回路126において、周波数が一致していると判断し、何も出力しない。

#### 【0060】

また、(0, 1)を取り込んだ後、次の取り込みタイミングが時刻  $t_9$ と  $t_{10}$ の間とすると、データの取り込み(サンプリング)は(1, 1)となる。このときは、次段の制御ロジック回路126において、クロックの周波数が低いと判断し、周波数を高めるためのUPパルス信号を出力する。一方、(0, 1)を取り込んだ後、次の取り込みタイミングが時刻  $t_{11}$ と  $t_{12}$ で(0, 0)をサンプリングする場合、制御ロジック回路126において、クロックの周波数が高いと判断し、周波数を低めるためのDOWNパルス信号を出力する。

#### 【0061】

このように、周波数検出回路12で周波数検出して得られたUP/DOWNパルス信号のディジタル信号(パルス信号)は、次段のチャージポンプ回路14に

供給され、当該回路14のトランジスタをON/OFFして例えば電流の流出／流入を行う。この電流制御するチャージポンプ回路14は、例えばMOSトランジスタやバイポーラトランジスタによって構成される。チャージポンプ回路14の出力電流は、ループフィルタ15で整流されてDC電圧（直流信号）に変換される。

## 【0062】

このDC電圧は、VCO16にその制御電圧として与えられる。VCO16は例えばバリキヤップを有する構成となっており、このバリキヤップに対して制御電圧が印加される。バリキヤップは、その印加される制御電圧に応じて容量が変化することによってVCO16の発振周波数クロックの周波数を制御する。この発振周波数クロックは、クロック発生器17を介して周波数検出回路12に帰還される。

## 【0063】

周波数検出回路12は、この帰還されたクロック信号ICLK, QCLKとNRZのデジタル信号DATAとの周波数比較を行う。上述した周波数比較による周波数制御の動作が繰り返されることによってVCO16の発振周波数クロックの周波数が入力信号DATAの目標周波数にロックされる。このロック状態でループフィルタ15の出力電圧は一定になり、これ以降、周波数が変動しない限り変化しない。

## 【0064】

VCO16の発振周波数クロックの周波数が入力信号DATAの目標周波数にロックされると、周波数検出回路12の動作は固定された状態（即ち、周波数検出回路12の出力信号であるUP/DOWN信号が“L”レベル固定の状態）になる。このとき、チャージポンプ回路14のコンデンサC11の電荷を充放電する電流がチャージポンプ回路13のそれに比べて十分大きいとすると、この周波数検出回路12の動作に引き続いて、位相検出回路11が実質的に動作することになる。

## 【0065】

すなわち、周波数検出回路12の検出出力に基づくDC電圧に、位相検出回路

11の検出出力に基づくDC電圧がループフィルタ15で重畠されてVCO16に印加する制御電圧をさらに変化させることにより、VCO16の発振周波数クロックの位相を制御する。

#### 【0066】

具体的には、位相検出回路11において、入力信号DATAに対するVCO16の発振周波数クロックの位相の遅れ／進みを検出する。この位相の遅れ／進みに応じて位相検出回路11の出力ディジタル（パルス）信号は、次段のチャージポンプ回路13に供給され、当該回路13のトランジスタをON/OFFして例えば電流の流出／流入を行う。この電流制御するチャージポンプ回路13は、周波数検出回路12側のチャージポンプ回路14と同様に、例えばMOSトランジスタやバイポーラトランジスタによって構成される。

#### 【0067】

チャージポンプ回路13の出力電流は、ループフィルタ15で整流されてDC電圧に変換される。このDC電圧は、周波数検出回路12側のDC電圧にループフィルタ15で重畠されてVCO16にその制御電圧として供給され、先述したバリキヤップに印加される。バリキヤップは、その印加される制御電圧に応じて容量が変化することによってVCO16の発振周波数クロックについてその位相を制御する。

#### 【0068】

この位相が制御されたVCO16の発振周波数クロックは、位相比較回路11に帰還される。位相検出回路11は、この帰還されたVCO16の発振周波数クロックとNRZのディジタル信号DATAとの位相比較を行う。そして、上述した位相検出および位相制御の動作が繰り返されて、最終的には、VCO16の発振周波数クロックの位相も入力信号DATAと一致することになる。

#### 【0069】

なお、本PLL回路10では、チャージポンプ回路13, 14としてシングル出力構成のものを、VCO16としてシングル入力構成のものをそれぞれ用いるとともに、ループフィルタ15として、チャージポンプ回路13, 14の各出力端子間に接続された抵抗R11と、チャージポンプ回路14の出力端子とグラン

ドとの間に接続されたコンデンサC11とからなるものを用いる構成としたが、PLL回路としてはこの構成のものに限られるものではない。

## 【0070】

すなわち、例えば図3に示すように、チャージポンプ回路13'，14'として差動出力構成のものを、VCO16'として差動入力構成のものをそれぞれ用いるとともに、ループフィルタ20として、チャージポンプ回路13'，14'の各一方の出力端子間に接続された抵抗R12と、チャージポンプ回路14'の差動出力端子間に接続されたコンデンサC12と、チャージポンプ回路14'，13'の各他方の出力端子間に接続された抵抗R13とからなる構成のPLL回路10'であっても良い。

## 【0071】

図4に、上述した本発明に係るPLL回路10（10'）で用いられる周波数検出回路12の具体的な回路構成の一例、特に先述した制御ロジック回路126の内部構成の一例を示す。先ず、その回路構成について説明する。

## 【0072】

図4において、ICLK入力端子31にはクロック信号ICLKが、QCLK入力端子32にはクロック信号QCLKがそれぞれ供給される。また、データ入力端子33にはNRZのデジタル信号DATAが供給される。ここで、ICLK入力端子31、QCLK入力端子32およびデータ入力端子33は、図1のICLK入力端子122、QCLK入力端子123およびデータ入力端子121にそれぞれ対応している。

## 【0073】

ICLK入力端子31はD-FF34のD入力端子に接続され、QCLK入力端子32はD-FF35のD入力端子に接続されている。データ入力端子33は、D-FF34，35の各CLK端子に接続されている。これらD-FF34，35は、図1のD-FF124，125にそれぞれ対応している。

## 【0074】

これら各D-FF34，35は、クロックCLKの立ち上がりでD入力データを取り込む構成となっている。すなわち、D-FF34は入力信号DATAの立

立ち上がりでクロック信号 I C L K をサンプリングする機能を持ち、D-F F 3 5 は入力信号 D A T A の立ち上がりでクロック信号 Q C L K をサンプリングする機能を持っている。

## 【0075】

D-F F 3 4 のQ出力端子は、2入力ORゲート3 6の入力端子Aに接続されるとともに、3入力ORゲート3 8の反転入力端子Aに接続され、さらに3入力のORゲート3 9の入力端子Bに接続されている。また、D-F F 3 5 のQ出力端子は、ORゲート3 6の反転入力端子Bに接続されるとともに、ORゲート3 8の反転入力端子Bに接続され、さらにORゲート3 9の入力端子Cに接続されている。

## 【0076】

ORゲート3 6の出力端子は、D-F F 3 7のD入力端子に接続されている。D-F F 3 7のCL K入力端子は、I C L K入力端子3 1に接続されている。D-F F 3 7のQ出力端子は、ORゲート3 8の入力端子Cに接続されるとともに、ORゲート3 9の入力端子Aに接続されている。

## 【0077】

ORゲート3 8, 3 9の各出力端子は、D-F F 4 0, 4 1の各D入力端子にそれぞれ接続されている。D-F F 4 0, 4 1の各CL K入力端子は、I C L K入力端子3 1に接続されている。D-F F 4 0, 4 1の各Q出力端子は、回路出力端子4 2, 4 3にそれぞれ接続されている。なお、D-F F 4 0, 4 1の各Q出力端子は反転出力端子となっている。

## 【0078】

上述したORゲート3 6、D-F F 3 7、ORゲート3 8, 3 9およびD-F F 4 0, 4 1により、図1の制御ロジック回路1 2 6が構成されている。但し、この回路構成は一例に過ぎず、これに限定されるものではない。

## 【0079】

次に、上記構成の周波数検出回路の回路動作について、図5および図6のタイミングチャートを用いて説明する。なお、図5はUPパルス信号を出力するときのタイミングチャート、図6はDOWNパルス信号を出力するときのタイミング

チャートをそれぞれ示している。また、図5および図6において、波形(a)～(k)は、図4の各ノード(a)～(k)の波形をそれぞれ示している。

#### 【0080】

先ず、図5のタイミングチャートを用いて、UPパルス信号を出力するときの回路動作について説明する。今、入力信号DATA(c)の波形が、時刻t2とt3の間で“L”レベルから“H”レベルに変化し、時刻t6付近で“H”レベルから“L”レベルに変化し、時刻t9とt10の間で“L”レベルから“H”レベルに変化し、それ以降は“H”レベルを維持しているものとする。

#### 【0081】

D-FF34, 35は、入力信号DATA(c)の波形の立ち上がりエッジでクロック信号ICLK(a), QCLK(b)をそれぞれ取り込む。時刻t2～t3の期間では、クロック信号ICLK(a)が“L”レベル、クロック信号QCLK(b)が“H”レベルであるため、これらのレベルをD-FF34, 35が取り込むことで、D-FF34のQ出力信号(d)が“L”レベル、D-FF35のQ出力信号(e)が“H”レベルになる。

#### 【0082】

D-FF34, 35の各CLK端子に供給される入力信号DATA(c)の波形の次の立ち上がりエッジは、時刻t9とt10の間に存在し、その時点におけるクロック信号ICLK(a)とクロック信号QCLK(b)の各レベルはそれぞれ“H”レベルである。したがって、D-FF34のQ出力信号(d)は、時刻t9とt10の間で“L”レベルから“H”レベルに変化する。

#### 【0083】

このとき、クロック信号QCLK(b)のレベルが“H”レベルであるため、D-FF35のQ出力信号(e)は変化せず、“H”レベルのままである。これ以降時刻t16までは、入力信号DATA(c)の波形は変化せず、また波形の立ち上がりがないため、D-FF34, 35の各Q出力信号(d), (e)は変化せず、それまでのレベルをそのまま維持する。

#### 【0084】

入力信号DATA(c)が時刻t2とt3の間で変化する時点において、D-

FF34のQ出力信号(d)の“L”レベルがORゲート36の入力端子Aに、D-FF35のQ出力信号(e)の“H”レベルがORゲート36の反転入力端子Bにそれぞれ供給されるため、ORゲート36の出力信号(f)は“L”レベルとなる。また、入力信号DATA(c)の次の変化点の“L”レベルから“H”レベルへの遷移は時刻t9とt10の間で起こる。

#### 【0085】

この“L”レベルから“H”レベルへの遷移タイミングにおいて、D-FF34のQ出力信号(d)は“L”レベルから“H”レベルに変化し、D-FF35のQ出力信号(e)は“H”レベルのままであるから、ORゲート36の出力信号(f)は、“L”レベルから“H”レベルに変化する。これ以降時刻t16まで入力信号DATA(c)の波形の変化は無いので、ORゲート36の出力信号(f)は“H”レベルを維持し続ける。

#### 【0086】

ORゲート36の出力信号(f)はD-FF37のD入力端子に供給される。このD-FF37にはそのCLK入力として、D-FF34, 35と異なり、クロック信号ICLK(a)が供給されている。これにより、D-FF37は、クロック信号ICLK(a)の立ち上がりエッジでそのD入力であるORゲート36の出力信号(f)を取り込む。

#### 【0087】

すなわち、D-FF37において、クロック信号ICLK(a)の立ち上がりタイミングt4でORゲート36の出力信号(f)が取り込まれ、その出力信号(g)が“L”レベルになる。また、次のクロック信号ICLK(a)の立ち上がりタイミングt8においては、ORゲート36の出力信号(f)が“L”レベルであるから、D-FF37のQ出力信号(g)は変化せず、“L”レベルを維持している。

#### 【0088】

さらに、時刻t12でのクロック信号ICLK(a)の立ち上がりエッジにおいては、ORゲート36の出力信号(f)が“H”レベルであるから、D-FF37のQ出力信号(g)は“L”レベルから“H”レベルへ変化する。また、時

刻  $t_{16}$ においても同様に、ORゲート36の出力信号（f）が“H”レベルであるから、D-FF37のQ出力信号（g）も“H”レベルであり、時刻  $t_{16}$ 以降もこの“H”レベルの状態を維持する。

#### 【0089】

3入力のORゲート38には、その反転入力端子AにD-FF34のQ出力信号（d）が、その反転入力端子BにD-FF35のQ出力信号（e）が、その入力端子CにD-FF37のQ出力信号（g）がそれぞれ供給される。

#### 【0090】

ここで、D-FF34のQ出力信号（d）の反転信号が、時刻  $t_2$ と  $t_3$ の間のDATA立ち上がりエッジから時刻  $t_9$ と  $t_{10}$ の間のDATA立ち上がりエッジまでは“H”レベルになり、このDATA立ち上がりエッジのタイミング以降は“L”レベルであり、D-FF35のQ出力信号（e）の反転信号が、時刻  $t_2$ と  $t_3$ の間のDATA立ち上がりエッジ以降は“L”レベルになり、さらにD-FF37のQ出力信号（g）が、時刻  $t_4$ から  $t_{12}$ までは“L”レベル、 $t_{12}$ 以降は“H”レベルになっている。したがって、ORゲート38の出力信号（h）は、時刻  $t_4$ から時刻  $t_9$ と  $t_{10}$ の間のDATA立ち上がりエッジまで“H”レベルになり、このDATA立ち上がりエッジの時点から時刻  $t_{12}$ まで“L”レベルになり、時刻  $t_{12}$ 以降は“H”レベルとなる。

#### 【0091】

一方、3入力のORゲート39には、その入力端子AにD-FF37のQ出力信号（g）が、その入力端子BにD-FF34のQ出力信号（d）が、その入力端子CにD-FF35のQ出力信号（e）がそれぞれ供給される。

#### 【0092】

ここで、D-FF34のQ出力信号（d）が、時刻  $t_2$ と  $t_3$ の間のDATA立ち上がりエッジから時刻  $t_9$ と  $t_{10}$ の間のDATA立ち上がりエッジまでは“L”レベルになり、このDATA立ち上がりエッジのタイミング以降は“H”レベルであり、D-FF35のQ出力信号（e）が、時刻  $t_2$ と  $t_3$ の間のDATA立ち上がりエッジ以降は“H”レベルになり、さらにD-FF37のQ出力信号（g）が、時刻  $t_4$ から  $t_{12}$ までは“L”レベル、 $t_{12}$ 以降は“H”レ

ベルになっている。したがって、ORゲート39の出力信号(i)は、時刻t4以降は“H”レベルを維持することになる。

#### 【0093】

ORゲート38の出力信号(h)はD-FF40のD入力端子に供給される。D-FF40は、D入力データであるORゲート38の出力信号(h)をクロック信号ICLK(a)に同期して取り込む。すなわち、D-FF40において、時刻t8のクロック信号ICLK(a)の立ち上がりエッジでORゲート38の出力信号(h)の“H”レベルが取り込まれる。

#### 【0094】

これにより、D-FF40の反転Q出力信号(j)が“L”レベルとなる。次のクロック信号ICLK(a)の立ち上がりエッジは時刻t12であり、その時点でのORゲート38の出力信号(h)が“L”レベルであるから、D-FF40の反転Q出力信号(j)が“H”レベルへ変化する。さらに、次のクロック信号ICLK(a)の立ち上がりエッジが時刻t16で、このときのORゲート38の出力信号(h)が“H”レベルであるため、D-FF40の反転Q出力信号(j)は、“H”レベルから“L”レベルへ変化する。このD-FF40の反転Q出力信号(j)をUPパルス信号として用い、回路出力端子42から次段のチャージポンプ回路(図1におけるチャージポンプ回路14)に供給する。

#### 【0095】

一方、ORゲート39の出力信号(i)はD-FF41のD入力端子に供給される。このD-FF41にも、クロック信号ICLK(a)がD入力として供給されているので、D入力データの取り込みはD-FF40と同じ取り込みタイミングとなる。すなわち、時刻t8において、ORゲート39の出力信号(i)が“H”レベルであるから、D-FF41の反転Q出力信号(k)は“L”レベルとなる。

#### 【0096】

また、次のクロック信号ICLK(a)の立ち上がりタイミングt12, t16においても同様に、ORゲート39の出力信号(i)が“H”レベルであるから、D-FF41の反転Q出力信号(k)は“L”レベルを出力し続ける。この

D-F F 4 1 の反転Q出力信号 (k) をDOWNパルス信号として用い、回路出力端子4 3 から次段のチャージポンプ回路（図1におけるチャージポンプ回路14）に供給する。

## 【0097】

次に、図6のタイミングチャートを用いて、DOWNパルス信号を出力するときの回路動作について説明する。ここで、入力信号DATAの波形が時刻t 2とt 3の間で“L”レベルから“H”レベルに変化し、時刻t 6付近で“H”レベルから“L”レベルに変化し、時刻t 11とt 12の間で再び“L”レベルから“H”レベルに変化し、その以降は“H”レベルを維持しているとする。

## 【0098】

D-F F 3 4, 3 5 は、入力信号DATA (c) の波形の立ち上がりエッジでD入力データ、即ちクロック信号ICLK (a), QCCLK (b) をそれぞれ取り込む。時刻t 2～t 3の期間では、クロック信号ICLK (a) が“L”レベル、クロック信号QCCLK (b) が“H”レベルであるため、これらのレベルをD-F F 3 4, 3 5 がサンプリングして取り込むことで、D-F F 3 4 のQ出力信号 (d) が“L”レベル、D-F F 3 5 のQ出力信号 (e) が“H”レベルになる。

## 【0099】

D-F F 3 4, 3 5 の各CLK端子に供給される入力信号DATA (c) の波形の次の立ち上がりエッジは、時刻t 11とt 12との間に存在し、その時点におけるクロック信号ICLK (a) とクロック信号QCCLK (b) の各レベルはそれぞれ“L”レベルである。したがって、D-F F 3 4 のQ出力信号 (d) は、“L”レベルを維持する。

## 【0100】

一方、クロック信号QCCLK (b) のレベルも“L”レベルであるため、D-F F 3 5 のQ出力信号 (e) は“H”レベルから“L”レベルに変化する。それ以降は、入力信号DATA (c) の波形が変化せず、また波形の立ち上がりがないため、D-F F 3 4, 3 5 の各Q出力信号 (d), (e) は変化せず、それまでのレベルをそのまま維持する。

## 【0101】

入力信号DATA(c)が時刻t2とt3の間で変化する時点において、D-FF34のQ出力信号(d)の“L”レベルがORゲート36の入力端子Aに、D-FF35のQ出力信号(e)の“L”レベルがORゲート36の反転入力端子Bにそれぞれ供給されるため、ORゲート36の出力信号(f)は“L”レベルとなる。また、入力信号DATA(c)の次の変化点の“L”レベルから“H”レベルへの遷移は時刻t11とt12の間で起こる。

## 【0102】

この“L”レベルから“H”レベルへの遷移タイミングにおいて、D-FF34のQ出力信号(d)は“L”レベルのままであり、またD-FF35のQ出力信号(e)は“H”レベルから“L”レベルに変化するから、ORゲート36の出力信号(f)は、“L”レベルから“H”レベルに変化する。これ以降入力信号DATA(c)の波形の変化は無いので、ORゲート36の出力信号(f)は“H”レベルを維持し続ける。

## 【0103】

ORゲート36の出力信号(f)はD-FF37のD入力端子に供給される。このD-FF37にはそのCLK入力として、D-FF34, 35のCLK入力端子に供給されている入力信号DATAと異なり、クロック信号ICLK(a)が供給されている。これにより、D-FF37は、クロック信号ICLK(a)の立ち上がりエッジでそのD入力であるORゲート36の出力信号(f)を取り込む。

## 【0104】

すなわち、D-FF37において、クロック信号ICLK(a)の立ち上がりタイミングt4でORゲート36の出力信号(f)が取り込まれ、その出力信号(g)が“L”レベルになる。また、次のクロック信号ICLK(a)の立ち上がりタイミングt8においては、ORゲート36の出力信号(f)が“L”レベルであるから、D-FF37のQ出力信号(g)は変化せず、“L”レベルを維持している。

## 【0105】

さらに、時刻  $t_{12}$  でのクロック信号 ICLK (a) の立ち上がりエッジにおいて、ORゲート36の出力信号 (f) が “H” レベルであるから、D-FF37のQ出力信号 (g) は “L” レベルから “H” レベルへ変化する。また、時刻  $t_{16}$  においても同様に、ORゲート36の出力信号 (f) が “H” レベルであるから、D-FF37のQ出力信号 (g) も “H” レベルであり、時刻  $t_{16}$  以後もこの “H” レベルの状態を維持する。

#### 【0106】

3入力のORゲート38には、その反転入力端子AにD-FF34のQ出力信号 (d) が、その反転入力端子BにD-FF35のQ出力信号 (e) が、その入力端子CにD-FF37のQ出力信号 (g) がそれぞれ供給される。

#### 【0107】

ここで、D-FF34のQ出力信号 (d) の反転信号が、時刻  $t_2$  と  $t_3$  の間のDATA立ち上がりエッジから時刻  $t_{18}$  までは “H” レベルになり、D-FF35のQ出力信号 (e) の反転信号が、時刻  $t_2$  と  $t_3$  の間のDATA立ち上がりエッジから時刻  $t_{11}$  と  $t_{12}$  の間までは “L” レベルで、またこの遷移以降は “H” レベルに変化し、さらにD-FF37のQ出力信号 (g) が、時刻  $t_4$  から  $t_{12}$  までは “L” レベル、 $t_{12}$  以降は “H” レベルになっている。したがって、ORゲート38の出力信号 (h) は、時刻  $t_4$  以降 “H” レベルになっている。

#### 【0108】

一方、3入力のORゲート39には、その入力端子AにD-FF37のQ出力信号 (g) が、その入力端子BにD-FF34のQ出力信号 (d) が、その入力端子CにD-FF35のQ出力信号 (e) がそれぞれ供給される。

#### 【0109】

ここで、D-FF34のQ出力信号 (d) が、時刻  $t_2$  と  $t_3$  の間のDATA立ち上がりエッジ以降は “L” レベルになり、D-FF35のQ出力信号 (e) が、時刻  $t_2$  と  $t_3$  の間のDATA立ち上がりエッジから時刻  $t_{11}$  と  $t_{12}$  の間の入力信号DATAの波形の立ち上がりエッジまで “H” レベルで、それ以降 “L” レベルであり、さらにD-FF37のQ出力信号 (g) が、時刻  $t_4$  から

$t_{12}$ までは“L”レベル、 $t_{12}$ 以降は“H”レベルになっている。したがって、ORゲート39の出力信号(i)は、時刻 $t_4$ から時刻 $t_{11}$ と $t_{12}$ の間の入力信号DATAの立ち上がりエッジ間で“H”レベル、またこのDATA立ち上がりエッジから時刻 $t_{12}$ の間は“L”レベルとなる。さらに、時刻 $t_{12}$ 以降の期間は“H”レベルを維持し続ける。

#### 【0110】

ORゲート38の出力信号(h)はD-FF40のD入力端子に供給される。D-FF40は、D入力データであるORゲート38の出力信号(h)をクロック信号ICLK(a)に同期して取り込む。すなわち、D-FF40において、時刻 $t_8$ のクロック信号ICLK(a)の立ち上がりエッジでORゲート38の出力信号(h)の“H”レベルが取り込まれる。

#### 【0111】

その結果、D-FF40の反転Q出力信号(j)が“L”レベルとなる。次のクロック信号ICLK(a)の立ち上がりエッジは時刻 $t_{12}$ 、 $t_{16}$ であり、その時点でのORゲート38の出力信号(h)が“H”レベルであるから、D-FF40の反転Q出力信号(j)は“L”レベルを維持する。

#### 【0112】

一方、ORゲート39の出力信号(i)はD-FF41のD入力端子に供給される。このD-FF41にも、クロック信号ICLK(a)がD入力として供給されているので、D入力データの取り込みはD-FF40と同じ取り込みタイミングとなる。すなわち、時刻 $t_8$ において、ORゲート39の出力信号(i)が“H”レベルであるから、D-FF41の反転Q出力信号(k)は“L”レベルとなる。

#### 【0113】

また、次のクロック信号ICLK(a)の立ち上がりエッジのタイミング $t_{12}$ において、ORゲート39の出力信号(i)が“L”レベルであるから、D-FF41の反転Q出力信号(k)は“H”レベルへ変化する。また、時刻 $t_{16}$ でORゲート39の出力信号(i)が“H”レベルであるから、D-FF41の反転Q出力信号(k)は“H”レベルから“L”レベルへ変化する。このD-F

F41の反転Q出力信号(k)をDOWNパルス信号として用い、回路出力端子43から次段のチャージポンプ回路(図1におけるチャージポンプ回路14)に供給する。

#### 【0114】

このように、D-FF40の反転Q出力信号であるUPパルス信号(j)は時刻t8からt18の期間で“L”レベルを維持し続ける一方、D-FF41の反転Q出力信号であるDOWNパルス信号(k)は時刻t12からt16の期間で“H”レベルを維持し、次段のチャージポンプ回路14に対する電流制御を行うことにより、VCO16への制御電圧を発生する。

#### 【0115】

以上から、図4の周波数検出回路の回路動作をまとめると次のようになる。あるDATA立ち上がりエッジの時点において、(ICLK, QCLK) = (0, 1)をサンプリングした後の次のDATA立ち上がりエッジ時点に(1, 1)をサンプリングすると、クロック信号ICLKの1周期分の長さのUPパルス信号を出力する。すなわち、この2つのDATA立ち上がりエッジの時点間にm(mは任意の整数)ビットのデータが存在すると、この間のクロック信号ICLKはmサイクル以下存在することになるから、クロック信号ICLKの周波数を高くするために、UPパルス信号のパルスが生じることになる。

#### 【0116】

また、あるDATA立ち上がりエッジ時点において(ICLK, QCLK) = (0, 1)をサンプリングした後の次のDATA立ち上がりエッジ時点に(0, 0)をサンプリングすると、クロック信号ICLKの1周期分の長さのDOWNパルス信号を出力する。すなわち、この2つのDATA立ち上がりエッジの時点の間にm'(m'は任意の整数)ビットのデータが存在すると、この間のクロック信号ICLKはm'サイクル以上存在することになるから、クロック信号ICLKの周波数を低くするために、DOWNパルス信号のパルスが生じることになる。

#### 【0117】

入力信号DATAにデューティ歪が無い場合、クロック信号ICLKと入力信

号DATAの周波数が完全に一致しているときは、(0, 0), (0, 1), (1, 0), (1, 1)のいずれかを入力信号DATAの立ち上がりエッジ時点でサンプリングし続け、UPパルス信号、DOWNパルス信号のいずれのパルスも生じることはない。

## 【0118】

入力信号DATAにデューティ歪がある場合でも、クロック信号ICLKと入力信号DATAの周波数が完全に一致しているときは、図7のタイミングチャートに示すように、クロック信号ICLK, QCLKを入力信号DATAの立ち上がりエッジのみでサンプリングするため、そのサンプリング値の組み合わせは常に一定となる。

## 【0119】

上述したように、PLL回路10(10')の周波数検出回路14(14')として、本実施形態に係る周波数検出回路を用いることにより、NRZのシリアル入力信号DATAの立ち上がりエッジ(タイミング)のみでクロック信号ICLKとクロック信号QCLKのサンプリングを行うと、入力信号DATAのデューティ比が変化しても、データとクロックの周波数が一致している場合に、そのサンプリング値は常に等しくなり、誤ったUPパルス信号やDOWNパルス信号を発生することが無くなり、安定したPLL動作ができる。

## 【0120】

なお、上記実施形態では、シリアル入力信号DATAの立ち上がりエッジで、クロック信号ICLKの“L”レベル(論理“0”)を、クロック信号QCLKの“H”レベル(論理“1”)をそれぞれサンプリングするとしたが、その論理の組み合わせは任意である。ただし、本実施形態に係る論理の組み合わせを探った場合には、図7のタイミングチャートから明らかなように、その論理の組み合わせが入力信号DATAの1周期のほぼ中央に位置することになるため、周波数調整後の位相調整時の制御を入力信号DATAの1周期の中央付近で行えることになるため、位相制御の制御範囲を広くとれるという利点がある。

## 【0121】

また、上記実施形態においては、入力信号DATAの立ち上がりエッジのみで

クロック信号 ICLK とクロック信号 QCLK のサンプリングを行うとしたが、入力信号 DATA の立ち下がりエッジのみでクロック信号 ICLK とクロック信号 QCLK のサンプリングを行うことも可能可能であり、この場合にも同様に、誤った UP パルス信号や DOWN パルス信号を発生することが無くなり、安定した PLL 動作ができる。

#### 【0122】

次に、本発明に係る PLL 回路 10 (10') で用いられる位相検出回路 11 について説明する。図 8 に、その回路構成の一例を示す。先ず、位相検出回路 11 の回路構成について説明する。

#### 【0123】

図 8において、入力信号 DATA が供給されるデータ入力端子 51 は、 DFF53 の D 入力端子に接続されるとともに、2 入力の EX-OR (排他的論理和) ゲート 55 の一方の入力端子 A に接続されている。一方、VCO16 の発振周波数クロックが供給される CLK 入力端子 52 は、 DFF53 の CLK 端子に接続されるとともに、 DFF54 の反転 CLK 端子に接続されている。

#### 【0124】

DFF53 の Q 出力端子は、 EX-OR ゲート 55 の他方の入力端子 B 、 2 入力の EX-OR ゲート 56 の一方の入力端子 A および DFF54 の D 入力端子にそれぞれ接続されている。 DFF54 の Q 出力端子は、 EX-OR ゲート 56 の他方の入力端子 B に接続されている。 EX-OR ゲート 55 の出力端子は UP 出力端子 57 に、 EX-OR ゲート 56 の出力端子は DOWN 出力端子 58 にそれぞれ接続されている。

#### 【0125】

続いて、上記構成の位相検出回路 11 の回路動作について、図 9 のタイミングチャートを用いて説明する。図 9 のタイミングチャートにおいて、波形 (a) ~ (f) は、図 8 の各ノード (a) ~ (f) の波形をそれぞれ示している。

#### 【0126】

今、 CLK 入力端子 52 に入力される VCO16 の発振周波数クロック VCO CLK (a) の立ち上がりを時刻 t0, t2, t4, t6, t8, t10, t12 とし、

$t_2$ ,  $t_{14}$ とし、また立ち下がりを時刻  $t_1$ ,  $t_3$ ,  $t_5$ ,  $t_7$ ,  $t_9$ ,  $t_{11}$ ,  $t_{13}$ ,  $t_{15}$ とする。

#### 【0127】

入力信号DATA (b) の波形は、時刻  $t_1$  と  $t_2$  の間で立ち下がり、時刻  $t_5$  と  $t_6$  の間で立ち上がり、この間は “L” レベルであるとし、時刻  $t_8$  と  $t_9$  の間で立ち下がり、この期間 “H” レベルを維持し、時刻  $t_{10}$  と  $t_{11}$  の間で立ち上がり、この期間 “L” レベルを維持し、さらに時刻  $t_{12}$  と  $t_{13}$  の間で立ち下がり、この期間 “H” レベルを維持し、それ以降時刻  $t_{15}$  まで “L” レベルとする。

#### 【0128】

D-FF53において、クロックVCOCLK (a) の立ち上がりタイミング  $t_2$  で入力信号DATA (b) の “L” レベルを取り込む。これにより、D-FF53のQ出力信号 (c) は “L” レベルに変化する。次のクロックVCOCLK (a) の立ち上がりタイミング  $t_4$  では、入力信号DATAが変化せず “L” レベルのままであるから、D-FF53のQ出力信号 (c) も変化せず、“L” レベルを維持する。

#### 【0129】

クロックVCOCLK (a) の次の立ち上がりタイミング  $t_6$  で入力信号DATAが “H” レベルであるから、D-FF53のQ出力信号 (c) は “H” レベルに変化する。また、時刻  $t_8$  におけるクロックVCOCLK (a) の立ち上がりタイミングでは、入力信号DATAが “H” レベルであり、この “H” レベルを取り込むので、D-FF53のQ出力信号 (c) は変化せず、“H” レベルのままである。

#### 【0130】

時刻  $t_{10}$ になると、入力信号DATAが “L” レベルに変化しているから、D-FF53のQ出力信号 (c) も “H” レベルから “L” レベルへ変化する。時刻  $t_{12}$ になると、入力信号DATAが “H” レベルであるから、D-FF53のQ出力信号 (c) が “H” レベルになり、次のクロックVCOCLK (a) の立ち上がりタイミング  $t_{14}$ になると、入力信号DATAが “L” レベルにな

っている。これにより、D-FF53ではこの“L”レベルを取り込み、そのQ出力信号(c)が“L”レベルへ変化する。

#### 【0131】

一方、D-FF54にはそのCLK入力として、クロックVCOCLK(a)の反転クロックが与えられている。したがって、D-FF54は、クロックVCOCLK(a)の立ち下がりの時刻t1, t3, t5, t7, t9, t11, t13, t15において入力信号DATAを取り込むことになる。

#### 【0132】

時刻t1において、D-FF53のQ出力信号(c)が“H”レベルであるから、D-FF54のQ出力信号(d)は“H”レベルになり、次のクロックVCOCLK(a)の立ち下がりタイミングt3まで、“H”レベルを維持する。時刻t3になると、D-FF53のQ出力信号(c)が“L”レベルであるから、この“L”レベルを取り込むことで、D-FF54のQ出力信号(d)は“H”レベルから“L”レベルに変化し、時刻t5を経て時刻t7の直前まで“L”レベルを維持する。

#### 【0133】

時刻t7のクロックVCOCLK(a)の立ち下がりタイミングでは、D-FF53のQ出力信号(c)が“H”レベルであるから、この“H”レベルを取り込むことにより、D-FF54のQ出力信号(d)は“H”レベルに変化する。時刻t9において、D-FF53のQ出力信号(c)は変化せず、時刻t10で“L”レベルに変化し、時刻t12までこの“L”レベルを維持し続けている。時刻t11では、D-FF53のQ出力信号(c)が“L”レベルになっており、D-FF54はこの“L”レベルを取り込むので、そのQ出力信号(d)が“H”レベルから“L”レベルへ変化する。

#### 【0134】

時刻t13において、D-FF53のQ出力信号(c)が“H”レベルにあるからD-FF54はこの“H”レベルを取り込み、そのQ出力信号(d)が“H”レベルから“H”レベルへ変化する。また、この“H”レベルは次のクロックVCOCLK(a)の立ち下がりタイミングt15まで維持され、そこでD-F

F53のQ出力信号(c)の“L”レベルがDFF54に取り込まれる。これにより、DFF54のQ出力信号(d)が“H”レベルから“L”レベルへ変化する。

## 【0135】

次に、UPパルス信号(e)を発生するEX-ORゲート55の動作について、図9のタイミングチャートを用いて説明する。なお、EX-ORゲート55の入力端子A、Bには、入力信号DATA(b)とDFF53のQ出力信号(c)がそれぞれ供給されている。

## 【0136】

ここで、入力信号DATA(b)とDFF53のQ出力信号(c)の論理値が互いに異なる期間は、時刻t1とt2の間で入力信号DATA(b)が“H”レベルから“L”レベルに変化する時点からDFF53のQ出力信号(c)が“H”レベルである時刻t2までの期間、時刻t5とt6の間で入力信号DATA(b)が“L”レベルから“H”レベルに変化する時点からDFF53のQ出力信号(c)が“L”レベルから“H”レベルに変化する時点(t6)までの期間、時刻t8とt9の間で入力信号DATA(b)が“H”レベルから“L”レベルに変化する時点から時刻t10までの期間、時刻t10とt11の間で入力信号DATA(b)が“L”レベルから“H”レベルに変化する時点から時刻t12までの期間、さらに時刻t12とt13の間で入力信号DATA(b)が“H”レベルから“L”レベルに変化する時点から時刻t14までの期間の各期間である。

## 【0137】

そして、これらの期間中、EX-ORゲート55の出力信号(e)は“H”レベルとなる。また、それ以外の期間では、入力信号DATA(b)とDFF53のQ出力信号(c)の各信号レベルがそれぞれ“H”レベルと“H”レベル、または“L”レベルと“L”レベルになっているので、EX-ORゲート55の出力信号(e)は“L”レベルとなる。このEX-ORゲート55の出力信号(e)がUPパルス信号となる。

## 【0138】

次に、DOWNパルス信号（f）を発生するEX-ORゲート56の動作について、図9のタイミングチャートを用いて説明する。なお、EX-ORゲート56の入力端子A、Bには、D-FF53のQ出力信号（c）とD-FF54のQ出力信号（d）がそれぞれ供給されている。

#### 【0139】

ここで、D-FF53のQ出力信号（c）とD-FF54のQ出力信号（d）の論理値が互いに異なる期間は、時刻t2からt3の期間、時刻t6からt7の期間、時刻t10からt11の期間、時刻t12からt13の期間、さらに時刻t14からt15の期間の各期間である。

#### 【0140】

そして、これらの期間中、EX-ORゲート56の出力信号（f）は“H”レベルとなる。また、それ以外の期間では、D-FF53のQ出力信号（c）とD-FF54のQ出力信号（d）の各信号レベルがそれぞれ“H”レベルと“H”レベル、または“L”レベルと“L”レベルになっているので、EX-ORゲート56の出力信号（f）は“L”レベルとなる。このEX-ORゲート56の出力信号（f）がDOWNパルス信号となる。

#### 【0141】

このようにして、入力信号DATAが変化する度にUPパルス信号（e）とDOWNパルス信号（f）のパルス波形がそれぞれ1回ずつ発生する。この回路例の場合には、DOWNパルス信号（f）のパルス幅は常に一定であり、UPパルス信号（e）のパルス幅を調整することにより、位相の制御が行われることになる。

#### 【0142】

図10は、本発明に係る光通信受信装置の構成例を示すブロック図である。図10において、光信号が光検出器（PD）61で受光され、ここで電気信号に変換されて信号電流として出力される。この信号電流は、I（電流）-V（電圧）変換回路62で信号電圧に変換され、アンプ63で増幅されてリタイミング回路64およびPLL回路65に供給される。

#### 【0143】

P L L回路65は、増幅器63から供給される受信データからそれに含まれるクロック成分を抽出し、このクロック成分に位相同期した新たなクロック信号を生成してリタイミング回路64に供給するために設けられたものである。このP L L回路65として、先述した実施形態に係るP L L回路10(10')が用いられる。リタイミング回路64は、P L L回路65から与えられるクロック信号に基づいて、増幅器63から供給される受信データをリタイミング(一種の波形整形)して出力する。

#### 【0144】

このように、例えばN R Zのデジタルデータを用いる光通信において、その受信装置のP L L回路65として先述した実施形態に係るP L L回路を用いることにより、当該P L L回路は入力信号のデューティ比が変化しても安定したP L L動作が可能であるため、デューティ歪が生じ易い伝送信号のデータに対してもP L L回路65が誤動作することがなく、したがってリタイミング回路64でのリタイミング処理をより確実に行えることになる。

#### 【0145】

なお、ここでは、光通信の受信装置に適用した場合を例に採って説明したが、この適用例に限られるものではなく、特にデューティ歪が生じ易いデータを処理する処理系全般に適用可能である。

#### 【0146】

##### 【発明の効果】

以上説明したように、本発明によれば、P L L回路に用いられる周波数検出回路において、位相の異なる第1、第2の信号を入力信号の周期ごとに取り込むようにしたことにより、入力信号のデューティ比が変化した場合であっても、入力信号と第1、第2の信号との周波数が一致している限り、誤った第1／第2の周波数制御信号を発生することができないため、安定したP L L動作が可能となる。

##### 【図面の簡単な説明】

##### 【図1】

本発明の一実施形態に係るP L L回路の構成例を示すブロック図である。

##### 【図2】

図1に示す周波数検出回路の回路動作を説明するためのタイミングチャートである。

## 【図3】

本実施形態に係るPLL回路の変形例を示すブロック図である。

## 【図4】

周波数検出回路の具体的な回路構成を示すブロック図である。

## 【図5】

図4に示す周波数検出回路のUPパルス信号を出力するときの回路動作を説明するためのタイミングチャートである。

## 【図6】

図4に示す周波数検出回路のDOWNパルス信号を出力するときの回路動作を説明するためのタイミングチャートである。

## 【図7】

入力信号DATAにデューティ歪があるときの回路動作を説明するためのタイミングチャートである。

## 【図8】

位相検出回路の具体的な回路構成を示すブロック図である。

## 【図9】

位相検出回路の回路動作を説明するためのタイミングチャートである。

## 【図10】

本発明に係る光通信受信装置の要部の構成を示すブロック図である。

## 【図11】

PLL回路の基本構成を示すブロック図である。

## 【図12】

周波数検出回路の従来例を示すブロック図である。

## 【図13】

従来例に係る周波数検出回路の回路動作を説明するためのタイミングチャートである。

## 【図14】

デューティ歪が有る場合と無い場合の入力信号DATAの波形図である。

【図15】

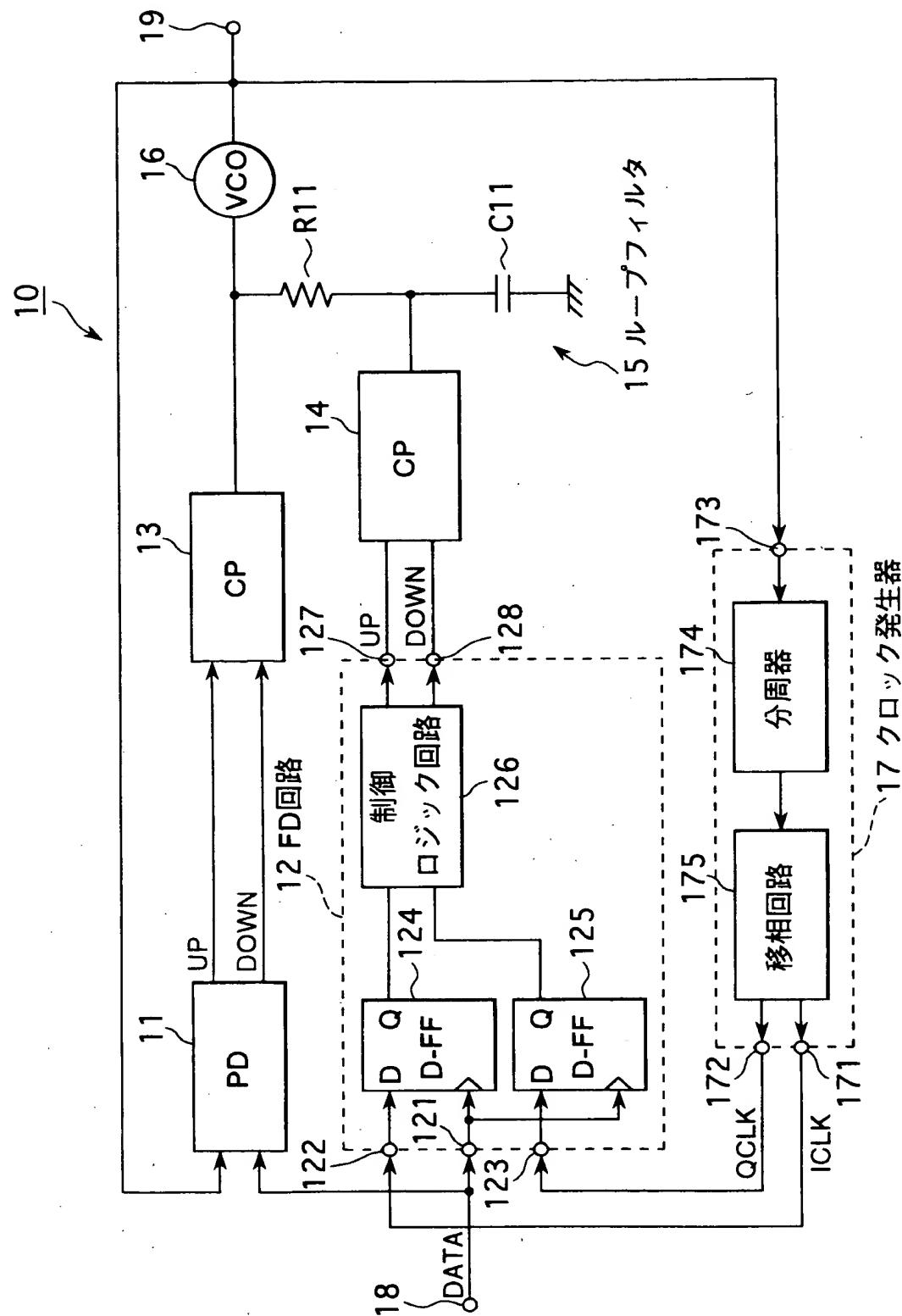
入力信号DATAにデューティ歪が有る場合の従来例に係る周波数検出回路の回路動作を説明するためのタイミングチャートである。

【符号の説明】

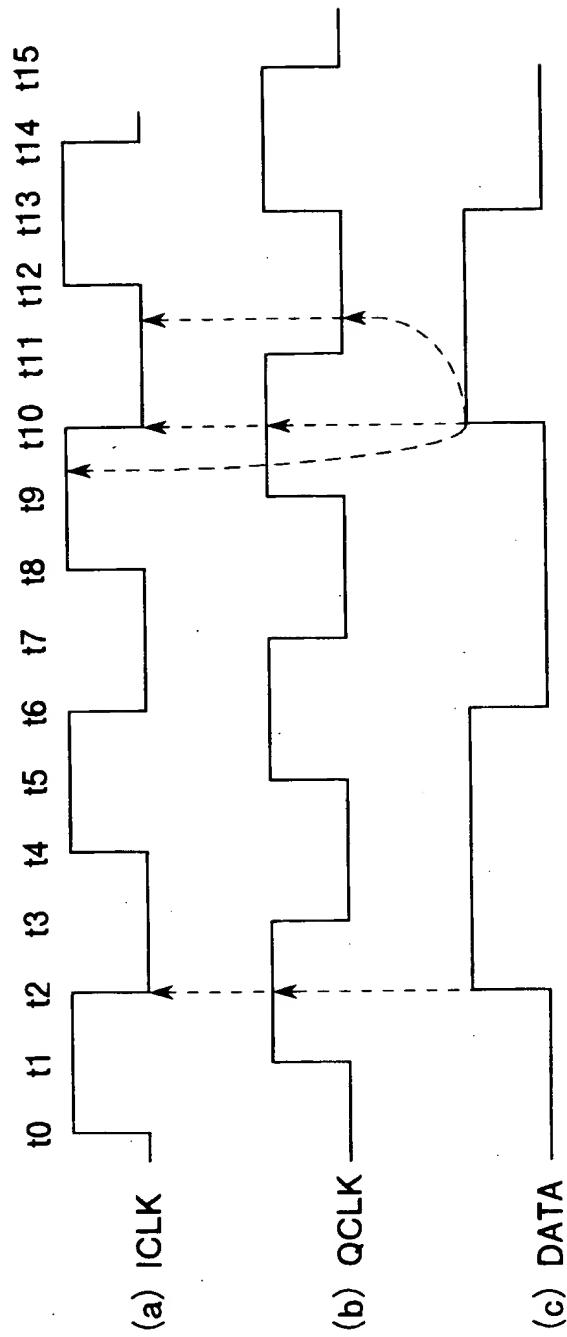
1 1 …位相検出回路、 1 2 …周波数検出回路、 1 3, 1 3', 1 4, 1 4' …  
チャージポンプ回路、 1 5, 2 0 …ループフィルタ、 1 6, 1 6' …VCO（電  
圧制御発振器）、 1 7 …クロック発生器

【書類名】 図面

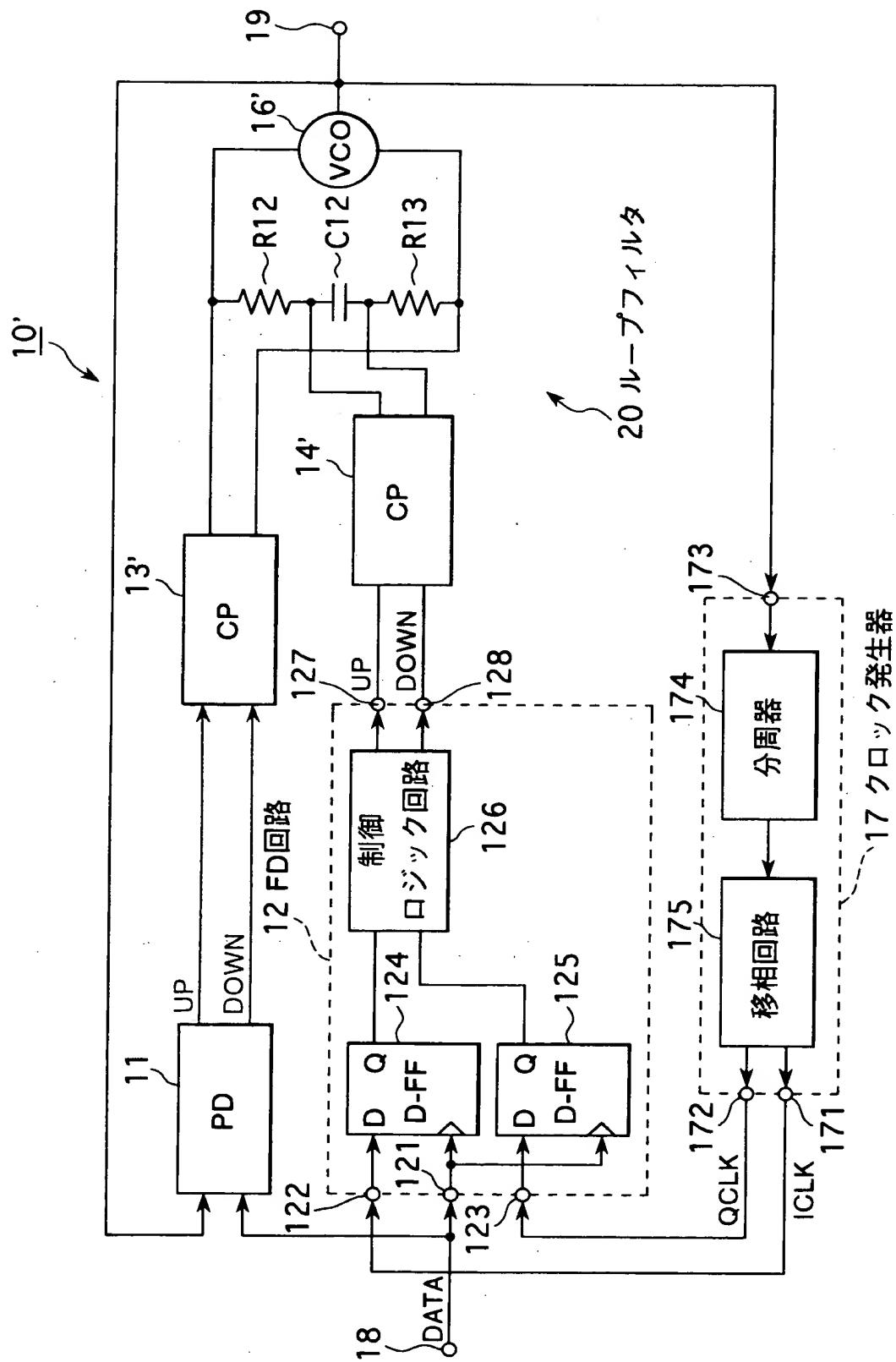
【図1】



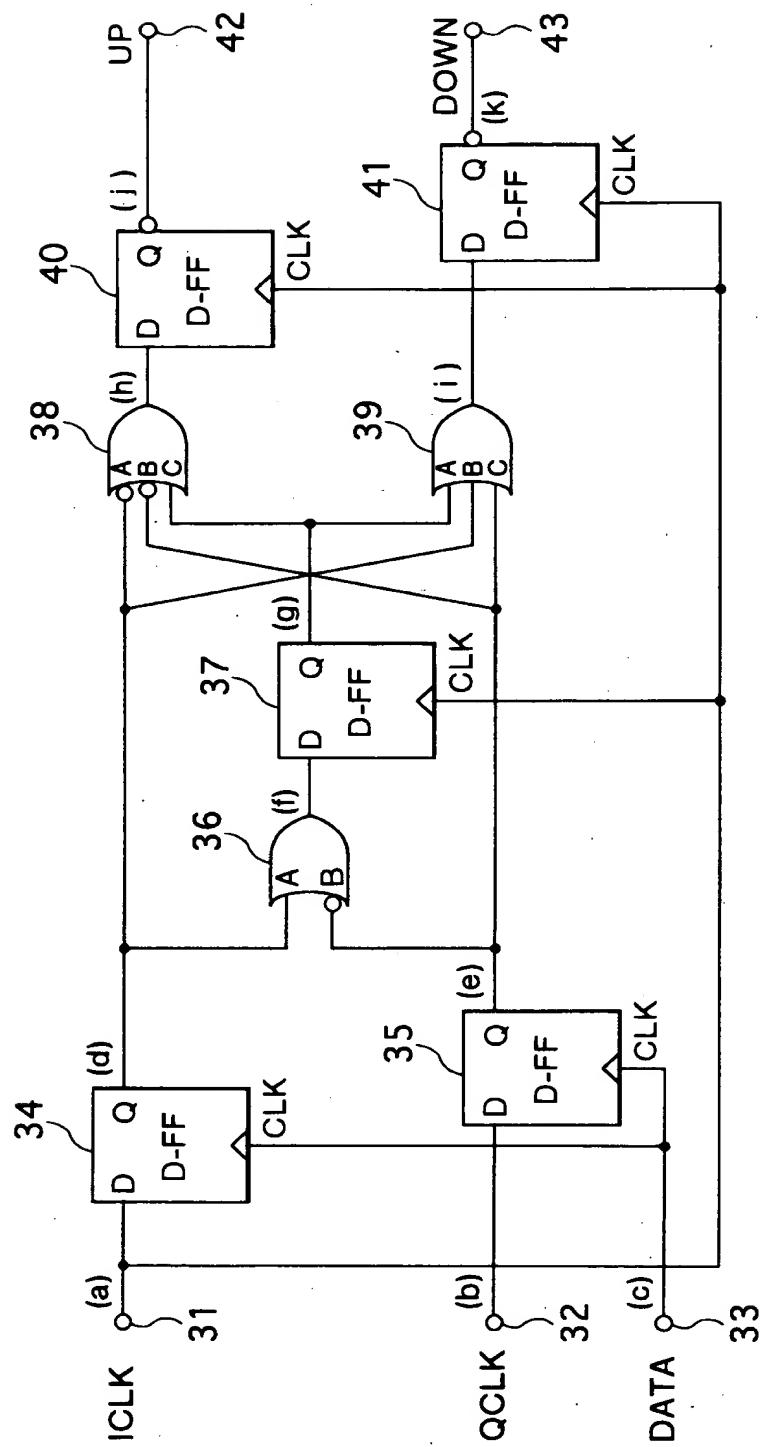
【図2】



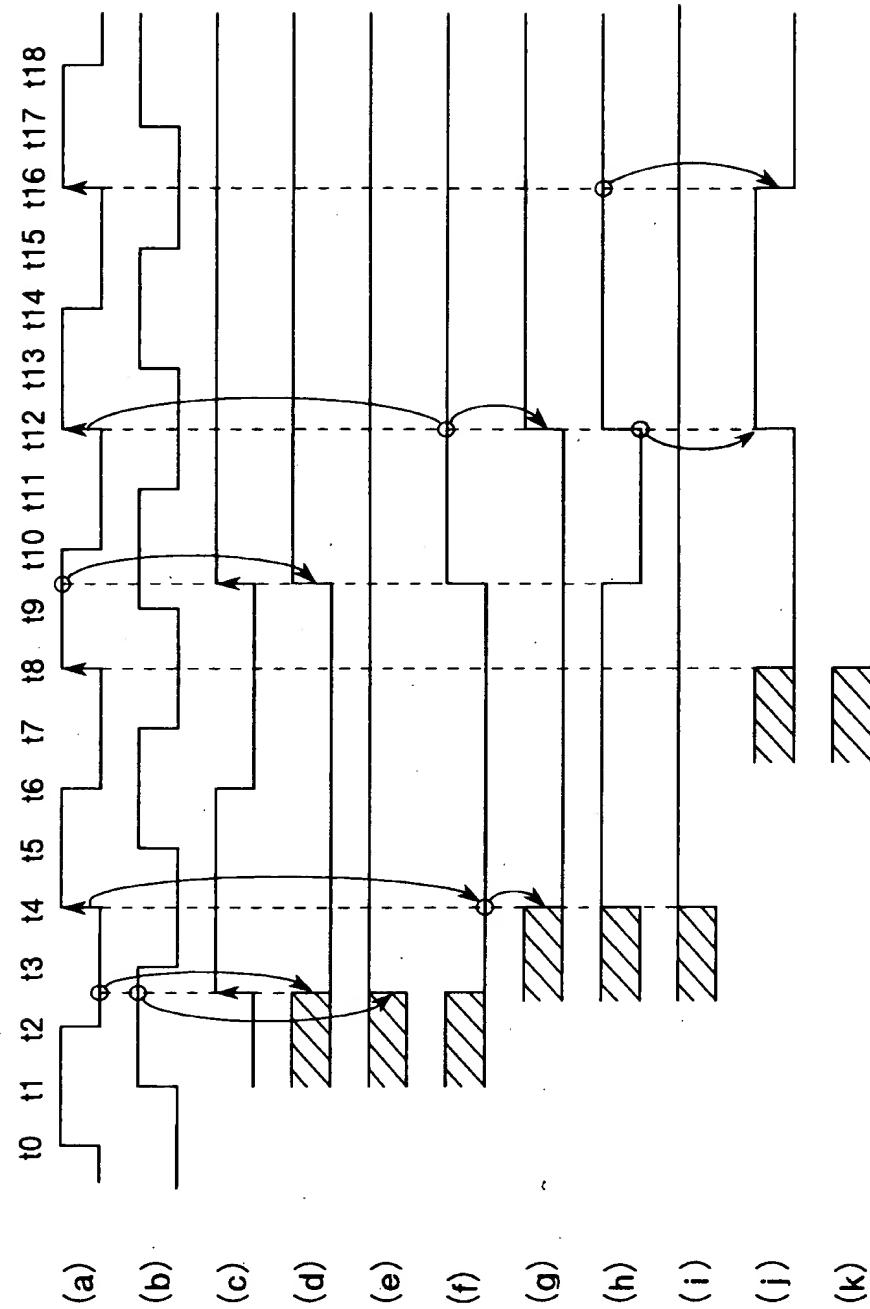
### 【図3】



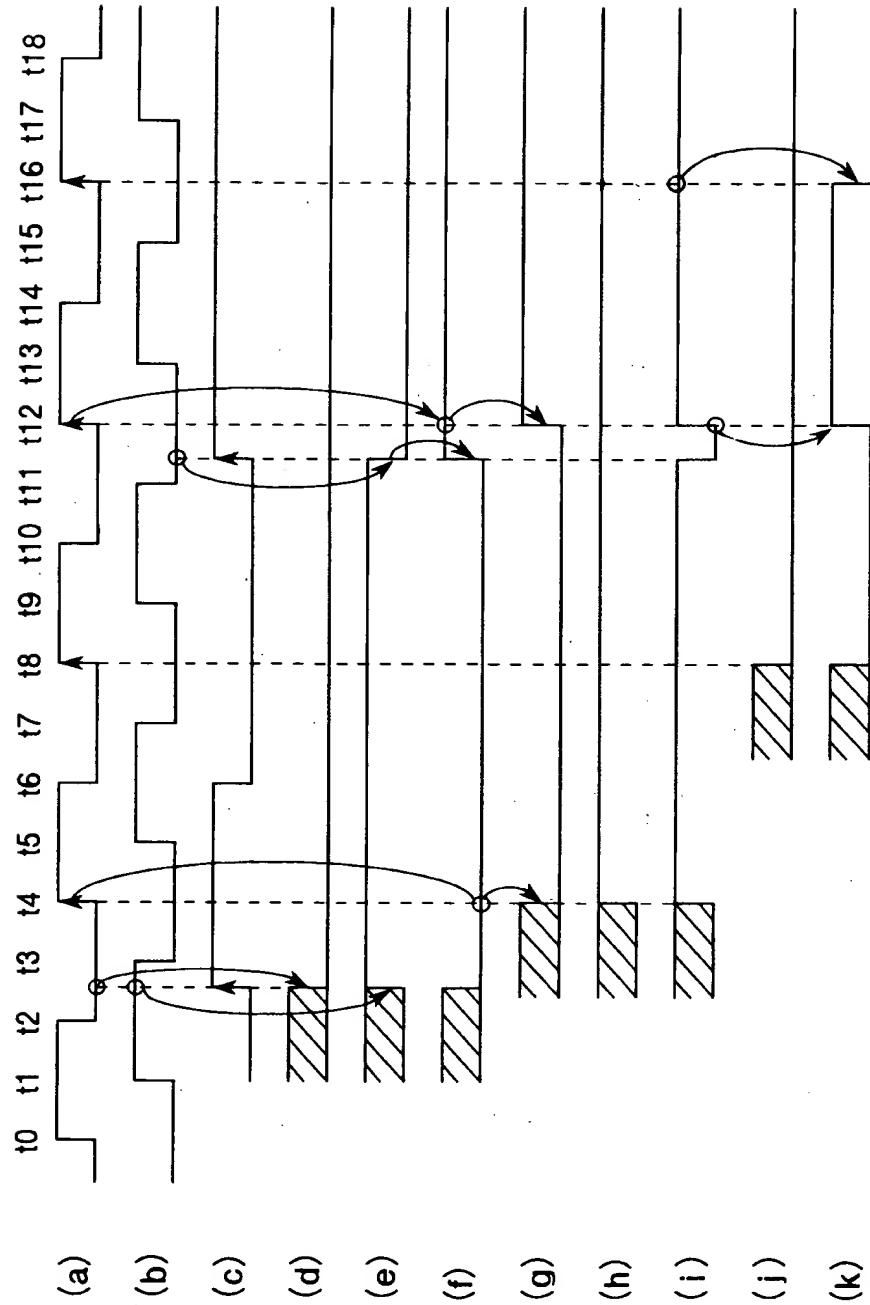
【図4】



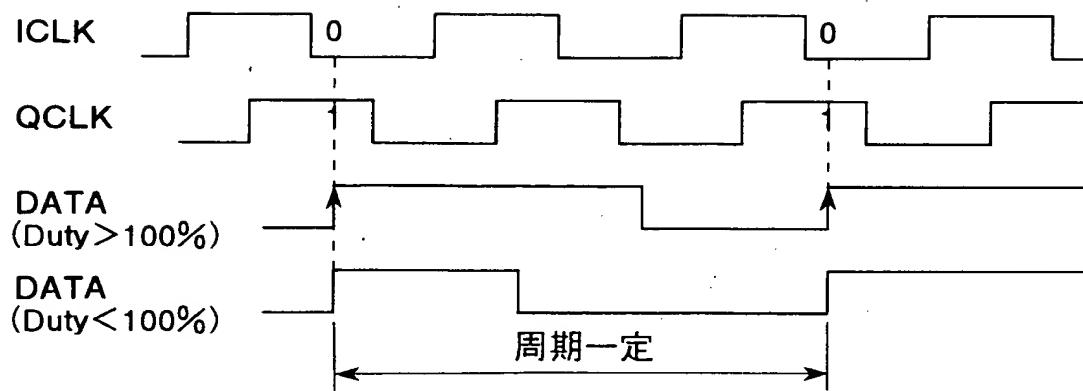
【図5】



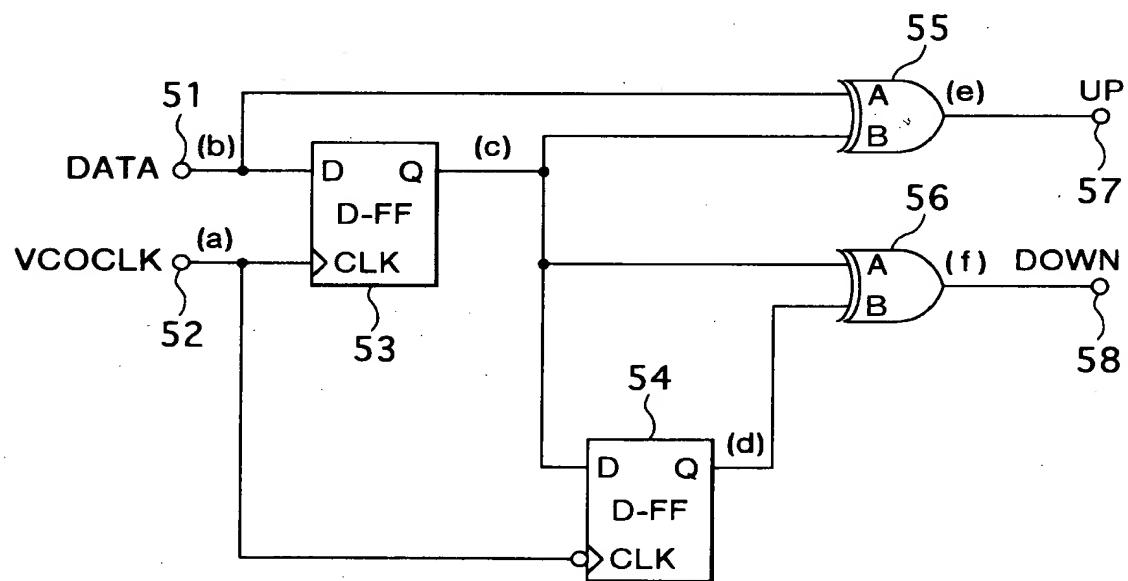
【図6】



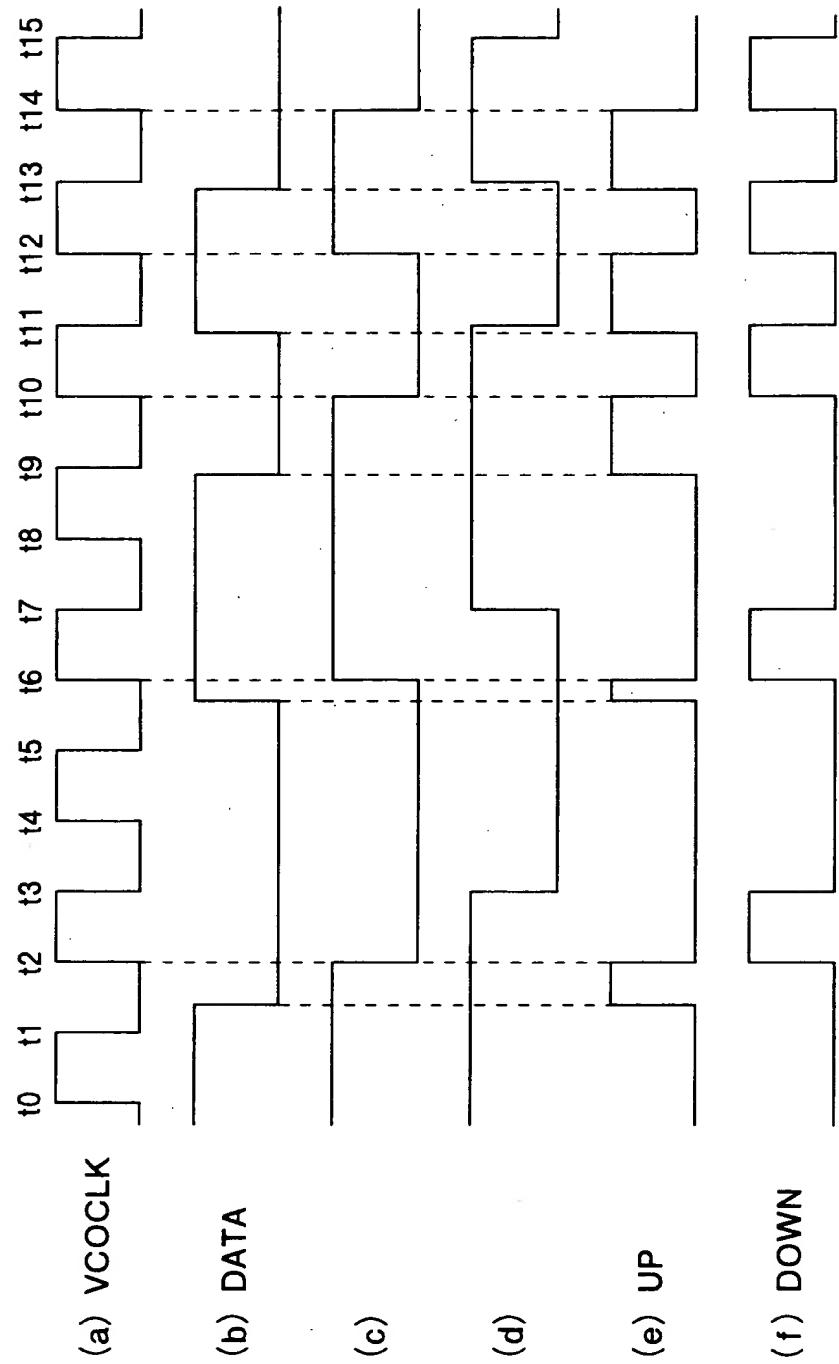
【図7】



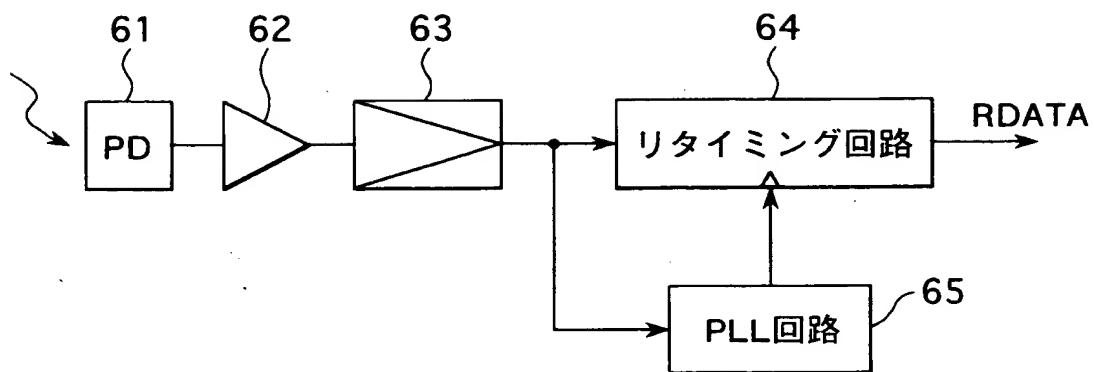
【図8】



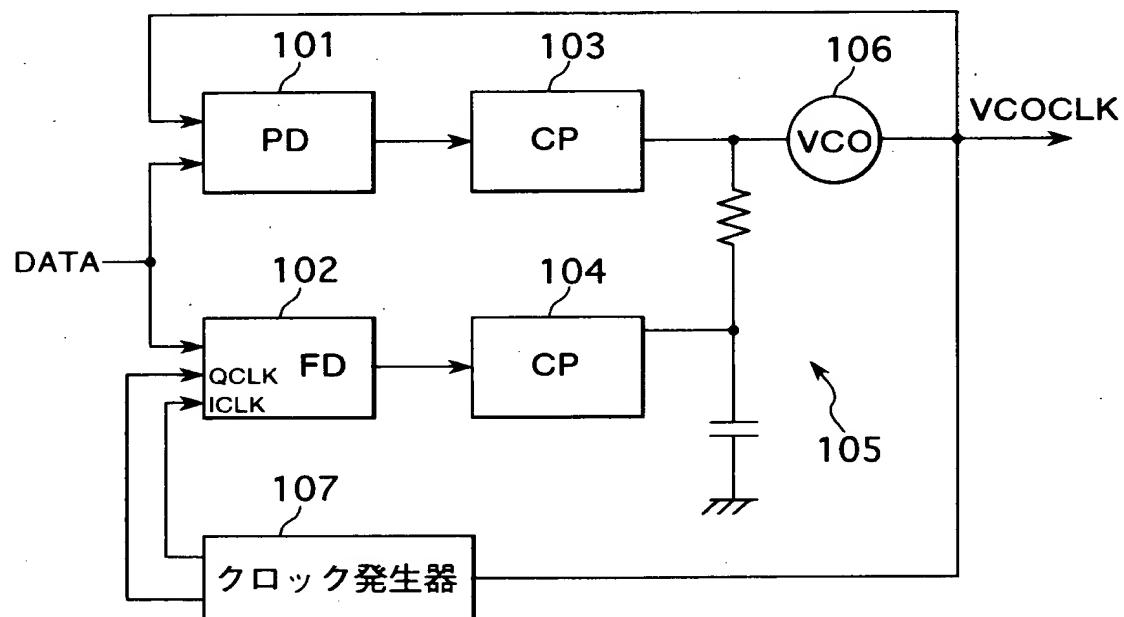
【図9】



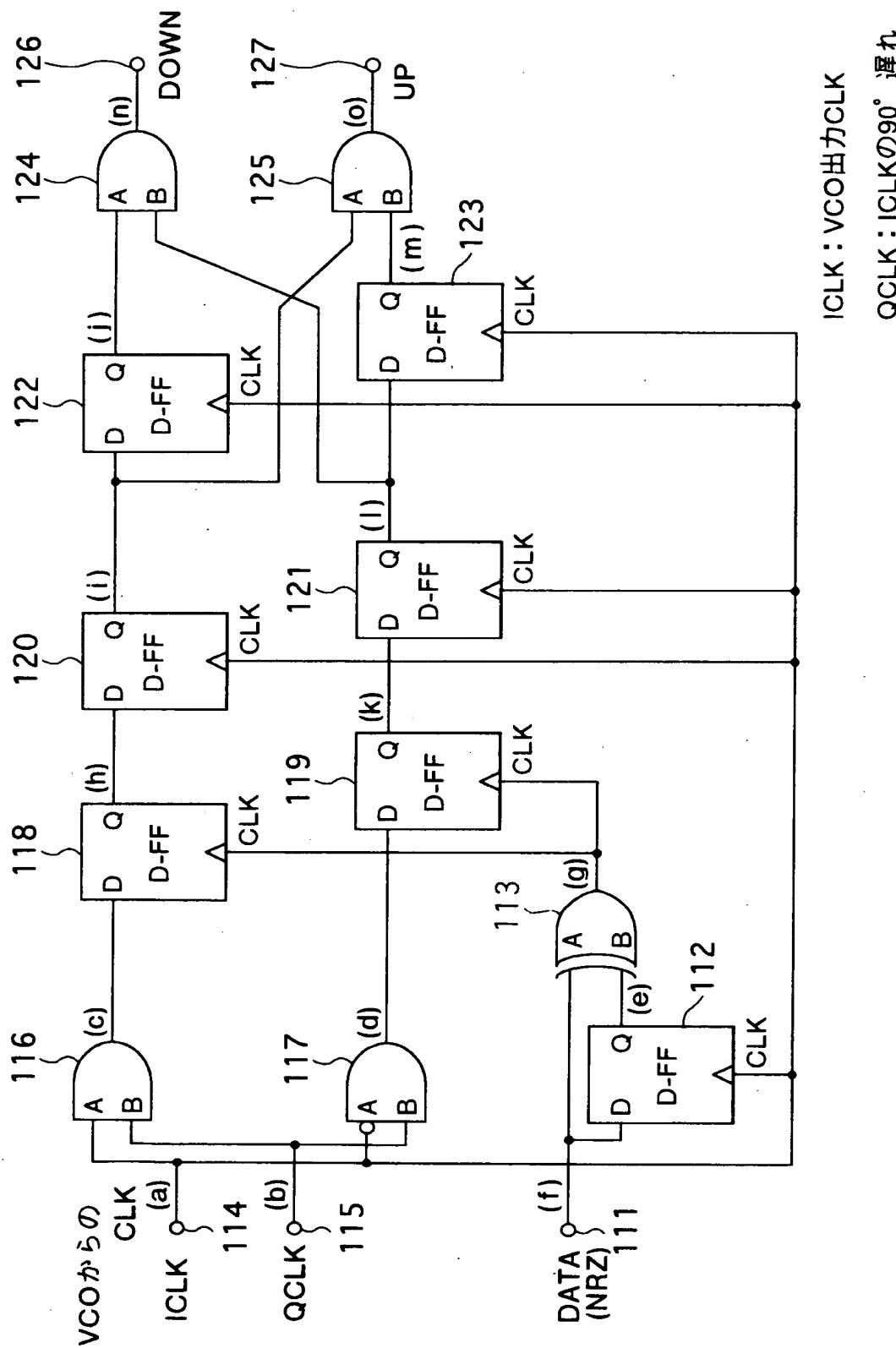
【図10】



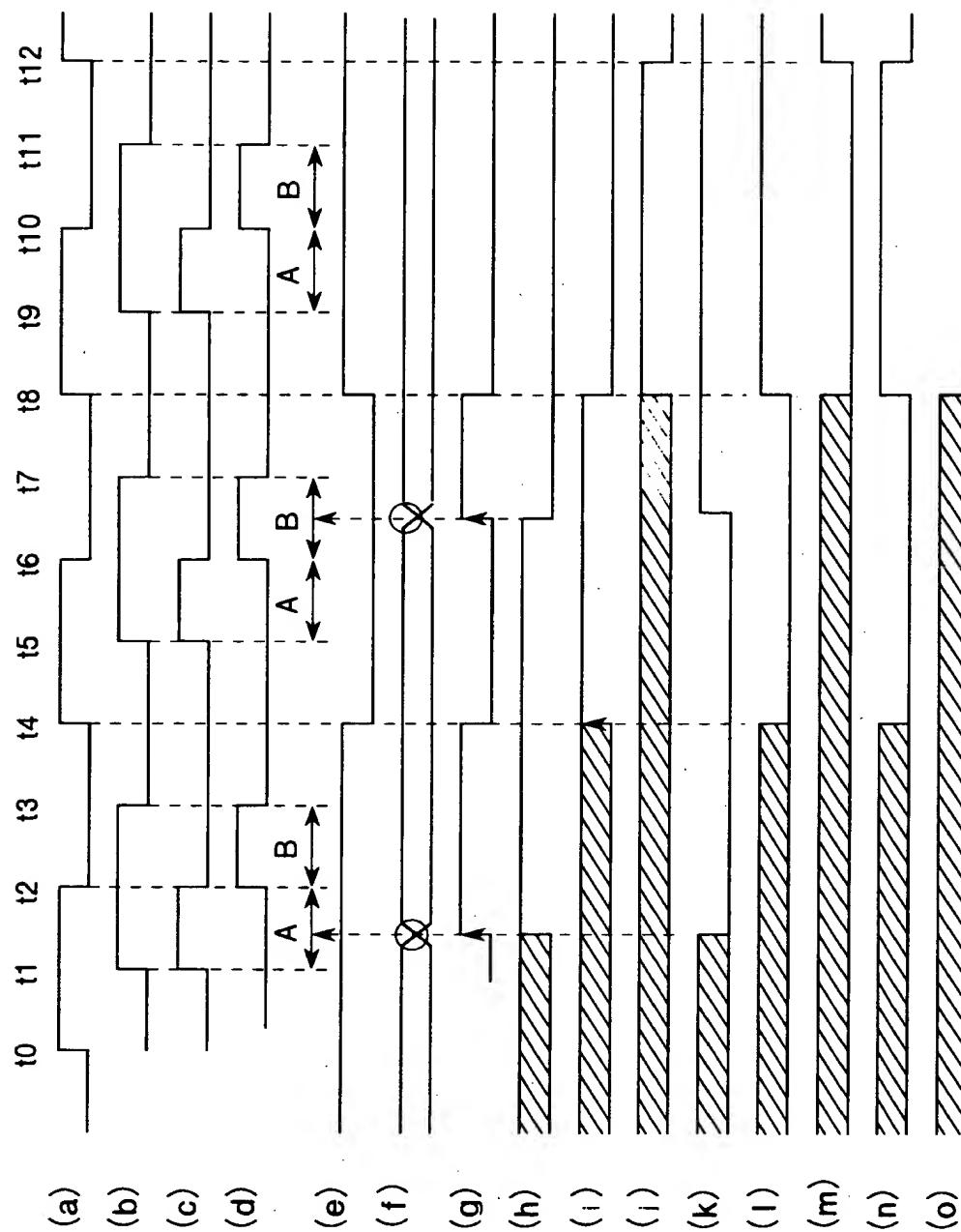
【図11】



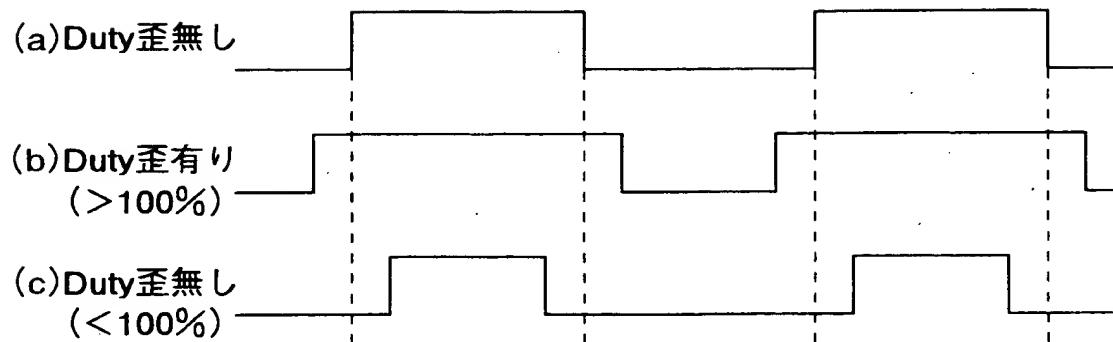
【図12】



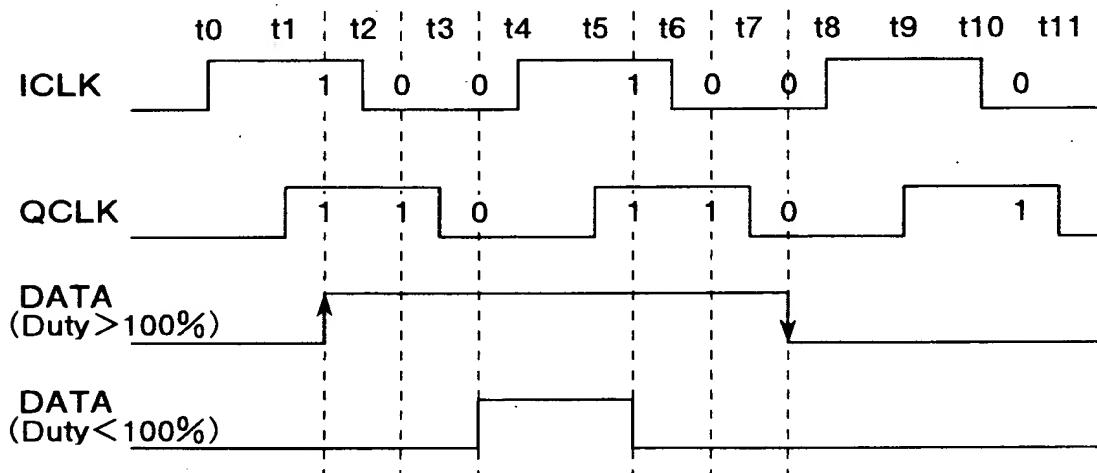
【図13】



【図14】



【図15】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 入力信号DATAの立ち上がりおよび立ち下がりの各変化点でクロック信号ICLK, QCLKのサンプリングを行うと、入力信号DATAにデュエティ歪があった場合に誤動作を起こす。

【解決手段】 位相検出回路11および周波数検出回路12を有するPLL回路10において、入力信号DATAに同期してその周期ごとに、立ち上がり変化点（または、立ち下がり変化点）でクロック信号ICLKをサンプリングするD-FF124と、同様にクロック信号QCLKをサンプリングするD-FF125と、これらD-FF124, 125でサンプリングした信号と次にサンプリングする信号とを論理演算する制御ロジック回路126とによって周波数検出回路12を構成し、制御ロジック回路126での論理演算結果に基づいてUPパルス信号またはDOWNパルス信号を発生するようにする。

【選択図】 図1

## 認定・付加情報

特許出願の番号	特願2001-004617
受付番号	50100033735
書類名	特許願
担当官	第七担当上席 0096
作成日	平成13年 1月17日

## &lt;認定情報・付加情報&gt;

## 【特許出願人】

【識別番号】	000002185
【住所又は居所】	東京都品川区北品川6丁目7番35号
【氏名又は名称】	ソニー株式会社
【代理人】	申請人
【識別番号】	100086298
【住所又は居所】	神奈川県厚木市旭町4丁目11番26号 ジェン トビル3階 船橋特許事務所
【氏名又は名称】	船橋 國則

次頁無

出願人履歴情報

識別番号 [000002185]

1. 変更年月日 1990年 8月30日

[変更理由] 新規登録

住 所 東京都品川区北品川6丁目7番35号

氏 名 ソニー株式会社